
魔法少女リリカルなのは ~複写と複製のフェイカー~

フィリエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～複写と複製のフェイカー～

【NZコード】

N8091M

【作者名】

フィリエ

【あらすじ】

朝、俺は電車に乗っていた。しかし、いきなり目の前が真っ暗になってしまう。気がついた俺は神様を名乗る青年に出会う。作者は完全な初心者です。至らない点ばかりだと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

なお、この小説は作者の妄想が多く含まれているため、キャラの口調がおかしい場合などがありますが、ご了承ください。

プロローグ（前書き）

馴文です。『了承ください』。

プロローグ

ピンポンパンボーン

「間もなく、13番線に、行きが、六両編成で到着します。黄
色い線の内側に、お下がりください。」

俺はその電車に乗り込む。乗り込むと同時に電車のドアが閉まり、
発車する。電車に揺られながら、今現在の時間を確認する。時刻は
8時5分。これなら学校には間に合つ。

そう思った瞬間

。

俺の目の前は一瞬で真っ暗になった・・・・。

「…………？」俺はいつたい……？

「やあ、ようやくお田観めかい？」

田を開けてみると、そこには20代半ばの青年が俺の顔を覗き込んでいた。

「おわつー。」

「そんなに驚かなくとも……」

「いやいや、誰だって驚くから。とにかくビビアンタは誰だ？」

「まあまあ、落ち着いて。まず、ここは天界。私は……そうだね、君たちの言つてゐるの神様、かな？」

「なんで疑問形！？ てか神様なのか！？」

「わづだよ。ほかに質問は？」

「えへっと、俺はなんでここにいるんだ？」

「ありや～覚えてないの？」

「ええ、残念ながら全く」

「…………記憶が全く無い。俺は…………誰だ？」

「あら～、記憶障害ですか。じゃあお教えしましょ～。貴方は列車

事故で死んだんですよ

「な・・・・、そつか・・・・。俺は」れからどうなるんだ?」

「・・・・・・・逆に聞こへ。お前はどうしたい?」

ツーなんだ? 急に雰囲気が変わった!?

「お、俺は
」

そんな」と、急に言われてもわからない。

「なんだ。てっきりすぐに元の世界に戻してくれ、などと聞か
と思つたが違うのか?」

元の世界?

なんだ?

元?

世界?

ソンナモノ俺は知らない。

「ああ、そつか。記憶障害だつたな。・・・・・しかたない、お前
に選択肢を与えよつ」

「選・・・・・選肢?」

「そうだ。ここで永遠にさまよい続けるか、新しい人生を受けなおすか、だ。もつとも、答えは出ているようなものだがな」

さまよう・・・？永遠に？ここで？・・・？それでもいいかもしない。新しい人生なんて、もう要らない。俺は疲れたんだ。何もかもに。もう、いいんだ。俺はもう

いのか？

ツ！な、なんだ・・・？これは・・・声？

いいのか？

ビニードー！？ビニーから聞こえるんだ！？

それでいいのか？

やめろ！やめてくれ！もういいんだ！俺はこのまま

本当にそれでいいのか？

瞬間、体に電撃が走る。つづいて頭の中にいろいろなものが直接浮かび上がる。これは・・・俺の記憶！？

「思い・・・出した・・・」

「ほう、自力で思い出すとは。で、どうするかね？」

そんなもの決まっている。俺は

「新しい人生を歩む！」

「そうこなくては一実にいい目をしている。さつきまでは大違ひだ」

全部思い出したからな。もうあの世界に興味はない！

「よからず、選別だ。5つまでお前の願い、叶えよう」

太つ腹だな、この神様。

「その前に聞こいつ。俺はどこへ飛ばされるんだ？」

「ふむ、教えてなかつたな。リリカルなのはの世界だ」

なのはつてーと・・・あれか！魔砲少女！あれ？なんか違つたかな？

「なるほど。じゃあ願いを言つぜ？一つ、身体能力の最大強化と魔力量SUSURランク以上」

「ほう。いきなりチートだが、いいだろ？だが、魔力量に関しては枷をつけよう。ですがにこれでは強すぎるのね」

「・・・わかった。あまり重いのは勘弁してほしいが」

「そりだな・・・。魔力を放出すると暴走する、でいいか？」

「それぐらいならなんとかなるな」

「承った。では、次だ」

「2つ目。やつきの枷の攻略としてゴニゾン^{アーヴィング}テバイスを一体用意してくれ」

「枷の攻略? いつたいどうやって?」

「ゴニゾンして俺の魔力を抑えてもらつたのさ」

「なるほど、そういうことか。叶えよう。残りは3つだ」

「3つ目だ。アルファ・スタイル複写眼がほしい。無論、暴走は無しだ」

「1つで伝勇^{アーヴィング}とは。いやはや、恐れ入ったよ、君の強欲^{アーヴィング}とは

伝説の勇者の伝説知つてんのかよ! それに強欲じやねえ!

「5つかなえてくれるって言われたんだから、叶えてもらわないと
もったいないだろ?」

「ふむ、確かに。私が言いたいこともあるからな。続けたまえ」

「4つ目。希少能力^{レアスキル}として無限の剣製が使えるよつにしてほしい」

「宝具まで使うか。・・・よからひ、投影もサービスで使えるよ
うにしておく。宝具はここ^{天界}にあるものだけなら投影できるだひつ。
もちろん、真名も解放できる」

「宝具までか。ありがとうございます」

「ふつ。さあ、最後の願いだ

「最後なんだが、俺が願ったときの一回だけ力を貸してくれないか？」

？」

「何？・・・・いや、なるほどな。ここまで神をこき使いつとは面白いくよからう。ただし、一回だけだぞ？」

「おう、それで十分だ。ありがとな。」

「礼を言われる筋合はない。では、そろそろ時間だな。さあ、道は開かれた！後はお前の自由だ。」

「ああ、行つてくるぜ」

そう言つてその場で反転、一步踏み出した。

「喜べ少年。お前の願いはようやく叶つ。」

「ん？なんか言つたか・・・・つてえええええーー？」

踏み出した先には、足場がなかつた。簡単に言つと六が開いていた。
え、何これー？

「一յんのクソ神があああああー覚えとけよーー。」

俺は奈落の底へと落ちて行つた・・・・。

プロローグ（後書き）

と、いうわけでプロローグをお送りしました。
書いててもうなにがなんだがわからなくなつて大変でした。
ですが、これからよりよい小説にしていこうと思いますので、応援
等よろしくお願ひします。

第一話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもいいという人はどうぞ。

第一話

「起きてください。

なんだ？俺はまだ眠りたい。邪魔しないでくれ。

「起きてください。

透き通るような声。誰だ？俺はこんな声知らない。

「起きてください。

はっきりと聞こえる。でも、嫌だ。もう少し、眠りたい。

「起きろって言つてるでしょ！

「うおわー！なんだー？敵襲かー！？」

びっくりして飛び起きる。せっかく寝つけると思ったのに・・・。

「やれやれ、やっと起きたのかい？なんとも、寝ぼすけなマスター

「やれやれ、やっと起きたのかい？なんとも、寝ぼすけなマスター
だな」

声がしたほうへ顔を向けると、そこには一人の女性が立っていた。
一人は見た目10代後半の燃えるような赤髪の女性で、もう一人も
見た目10代の綺麗な銀髪の女性だった。

「…………誰？」

「ちよ、ちょっと酷くないかい？あたしはアンタに呼ばれたから来たっての！」

「まあまあ、初対面だし仕方がないよ。ね、マスター？」

いまいち状況が飲み込めないが、わかつたことがある。赤髪の女性は口が悪く、銀髪の女性は丁寧な口調であることと、俺をマスターと呼ぶこと。もしかして彼女たちは……。

「なあ、お前らつてひょっとしてユニゾンデバイス……なのか？」

「『』明察。やすがは私のマスターですね」

「へえ、ちょっとは考える頭があるみたいだな」

若干1名にボロクソに言われてるな。俺の心のライフケイントはゼロよーとでも言つべきか。

「えーっと……名前。名前はあるのか？」

「いいえ。私たちは生まれたてのデバイスですから」

「じゃあ俺が決めてもいいか？」

「もちろんです。マスターは貴方だけですから」

「あんまり変な名前付けたらブツ飛ばすぞー。」

怖ええよーしかたない、なにか適当な名前を……。

「やつだな。シアとレン、なんてどうだ？赤髪、お前がレンな」

「赤髪言つなーでも、名前のセンスはまあまあいいとか」

「またそんなこと言つて。気に入つてるんでしょう？」

「なッ…そ…そ…そんなわけないだろー？」

レンヒテシンヒテレンなのか？てかシアヒトイジル側だったんだ……。

「あー、はい。落ち着けって。ゴホン。じゃあシア、レン。これからようじしく頼むよ」

「」^{イハズマハロード}解しました、我が主」

「あんまり堅苦じなくていいからね？」

「わかりました。といひで、マスターの名前を伺つてないのですが・・・」

あー、そういうやうだったな。でも、前世のは使つたくないし・・・

「俺か？俺は・・・和麻。^{ひらま}柊和麻だ。呼び方は・・・好きに呼んでくれ」

「」「じやあ和麻で」

「そこだけ息ピッタリだなオイ・・・まあこー。今すぐユニゾン

できるか?」

「もちろんです。融合事故なんて起こしませんよ?」

「なんたって特注だからな、あたしらは」

「それもやつだな。じゃあ行くぞ!『クロス・イン』ー。」

とたんに俺は光に包まれる。温かな光。そんな中、頭に声が響く。

(マスター、聞こえますか?)

「なつ・・・・・シア!-?ビ-ジ-だ-?」

(マスター。焦らすに言いたいことを心に思い浮かべてください)

(え、えと・・・・・?うか?)

(ええ、大丈夫です。それではマスター、バリアジャケットの構築をお願いします)

(どうすりゃいいんだ?)

(これもイメージして思い浮かべるだけでOKです)

(えーと、じゃあこれでー)

思い浮かべたのは、黒地のTシャツに黒のジーパン、それに地面につきそうなほど長い髪のロート。もちろんロートも黒。黒大好きだからね、俺。

(了解。バリアジャケット認識中……完了。構築中……
・構築完了)

すると、イメージした通りの格好になる。便利だな、魔法つて。

(構築完了しました。・・・マスター、黒一色はどうかと。それに
その「パートでは動きにくいですか?」)

(いいんだよ、これで。・・・ところで今がいつかわかるか?知識
は俺の記憶からでも引っ張つてきてくれ)

(少々お待ちを。・・・・・現在は無印、ですか?の冒頭です
ね。どうやら今夜、なのは嬢が魔法少女になるようです)

無印か~、よかつた~。友達から勧められて見てただけだから、A
~までしか知らないんだよね~。

(ふむふむ。じゃあ仕掛けるなら今夜か。あ、それとレンはどうい
つた?)

(レンは基本的にユニゾンした時には喋りません。マスターの機嫌
を損ねかねませんから)

(なるほどね。じゃあそろそろ行こうか。あ、リミッターは6つか
けてAまで落としてね。それと、念話は周りに人がいる時だけにす
るから)

(了解しました。・・・といひで行くのはどうか?

「決まつたんだろ？翠屋だよ」

Sideなのはふえー？は、はじめまして。私立聖祥大学付属小学校3年の高町なのはです。今、私はお父さんとお母さんのお店である喫茶店「翠屋」でお手伝いをしています。

「いらっしゃいませー！」

入ってきたのは私と同じくらいの年の方でした。しかも冬でもないのに真っ黒なマントを着ていました。暑くないのかな？

「一人だけど、カウンターの近く空いてる？」

「はい、『j案内します』

私はお客様をお客席に連れて行き、メニューを渡しました。

「ん~、どれもおこしそうだな・・・。じゃあ、ショーキーラム3つとコーヒーお願いします」

「はい。ショーキーラム3つとコーヒーですね。しばらくお待ちください」

私と向かい合いでいる方にコーヒー飲むんだ・・・。私は絶対に飲めない。わあ、早くお母さんに注文を伝えないとー。

「へえ、君 ハーヒー んだ」

「ええ、これ ふつづよっ。」

「お だねえ。と で、やあ やみひ 」

カウンターでお父さんとあの子がなにかお話してるの。なにを話してるんださう。

Side out

俺は翠屋に一歩入った瞬間硬直した。まさか、未来の魔王にいきなりエンカウンタするとは思つてもみなかつたからな。落ち着け、俺。平常心、平常心。

「一人だけど、カウンターの近く空いてる?」

カウンターの近くにしたのは土郎さんと話ができるかも知れないから。交友関係はちゃんと広げておかないとね。

「はい、じ案内します」

なのはの案内の元、俺はカウンター席についてメニューを広げた。くつ、どれを選べばいいんだ!なんて思いつつ、一回でいいから食べてみたかったモノを注文する。

「ん~、どれもおいしそうだな。。。じゃあ、ショーキーラーム3つとハーヒーお願いします」

実は俺、ショークリームが大好きだつたりする。いやいや、子供っぽいとか言つたな！

「はい。ショークリーム3つとコーヒーですね。しばらくお待ちください」

そう言つてなのはは奥へと引っ込んだ。さて、そろそろ……。

「へえ、君はもうコーヒーも飲めるんだ」

ほらきた。実はコーヒーを頼んだのはこの為。つまり、士郎さん側からこっちに声をかけるように仕向けたわけ。子供が一人で店に来て、なおかつコーヒーなんて頼んでるの見たら誰だって声をかけると思つ。

今回はそれを利用させてもらつたのさ。

「ええ、これくらいなら普通に飲めますよ？」

だって17ですし。体は9歳だけど。

「大人だねえ。ところで、今田は君一人なのかい？」

親いないからね。

「はい、そうです。あ、それと俺のことは和麻でいいですよ」

「和麻君か。僕は士郎、高町士郎だ。よろしく」

「はい、よろしくお願いします。士郎さん」

そうして、しばらく土郎さんと話をしていると、俺が注文したものを持ったのはと桃子さんがこちらへやってきた。

「はい、お待ちどう様」

「あ、どうせ。ありがとうございます」

とりあえず一口。・・・・・ウマーーーーー、今までに食べたことのない味だ。

「お、美味しい・・・・・」

「あー、ありがと。貴方のお名前は？」

「ふあい？・・・・・ごっくん。 桤和麻です」

「和麻君ね。年はいくつ?」

「9歳です。」

「あら、なのはと同じ年ね。なのは、自己紹介はもつした?」

「まだしないよ」

「なら丁度いいわ。なのは、和麻君に自己紹介しなさい」

しなくても全部知つてますよー。言わないけど。言つたら後が怖い。

「えと、高町なのはです。」

「俺は柊和麻。和麻でいい。」

「じゃあ私もなのはつて呼び捨てでいいよ」

「せうか。じゃあよろこへな、なのは」

「うんっー。」

ゾクツ！

「ー？」

「？ 和麻君どうしたの？」

「この殺氣は・・・恭也さんしかいないよね。

「いや、なんでもない。」
「あわつても、美味しかったよ

「これ以上ここにいたらヤバい。主に命とか。

「ふえ、もう行っちゃうの？」

「ぐう。そんな眼で見ないでー理性が、理性がああああ。

「また近いしうまくなるよ、絶対」

「うん・・・」

まあ今夜ですが。

「あ、もう行くの？」

「はい。また来させてもらいますね」

「ええ、待ってるわ」

「では、じゃあ今までした」

会計を終えて、外に出る。あつぶね、もう少しで戦闘フラグ立つと
こだつた・・・。さて、夜まで暇だな。人の来ないところで少し
投影の練習でもしておきますかねえ。

第一話（後書き）

いつも、作者です。今回はデバイスとのほとのファーストコンタクトを少し書いてみました。
原作への介入は次からになります。ここまで読んでください、ありがとうございました。

無印設定（前書き）

連載はじまつたばかりですが、設定をお送りいたします。

無印設定

「どうも、作者です」

和麻「どうも、主人公の和麻です」

作「さつそくですが、ステータスの発表に行きたいと思います」

和麻「それはいいんだけどさ。俺魔法何も知らないのに大丈夫なの
か?」

作「お前複写眼もってんだろ？ラーニングすればいいんだよ。」

和麻
あ
二テ！勝手にFFの用語使うんじゃねえよ

作「まけえ」たあいしんだよ！」

だ「和麻一 つたく、こいつは・・・まあいい。これが俺のステータス

名前：柊和麻
ひいらぎ かずま

年齡：17 9

Fate風ステータス

耐久力
敏捷度
精度

敏捷
：

耐久：A

筋力：A +

27

魔力：EX

幸運：D

宝具：E→EX

スキル

投影魔術・ランクE→EX

グラデーション・エア。自己のイメージからそれに沿ったオリジナルの鏡像を魔力によつて複製する魔術。

イメージが自分で完璧でなければ投影はできない。ゆえに投影で生み出したものは自己のイメージどおりの強度をもち、術者の知識が本物に近いほど現実においても完璧になる。

なお、なのはの世界には宝具は存在しないため、投影した物はランクは下がらず、破棄しない限り半永久的に存在し、真名開放もできる。

複写眼・ランクA++

全ての魔法の構成を読み取り、すぐさまそれを自分のものとして使用できるという能力を持つ。

この眼は暴走することはない。

レアスキル 希少能力

無限の剣製・E→EX

アンリミテッドブレイドワークス。全ての剣を形成する要素があり、オリジナルを見た事があれば容易く複製できる。なお結界形成時に用意されている武装は結界形成から維持まで魔力を消費し続ける。一度複製した武具は結界内に登録され、固有結界を起動させるとも投影魔術として作り出せる。

デバイス

シア&レン・魔導師ランクAA

神様からもつたデバイス。一見ただのユニゾンデバイスに見える

が、実はさらなる能力を持つている。
シアは礼儀正しく、レンは口が悪い。

和麻「俺が言つのもなんだがチートすげじゃね?」

作「そうだね。」

和麻「ところで作者

作「なんだ?」

和麻「F a t eのランクをなのはに当てはめるといつなるんだ?」

作「ん~、そうだね・・・。だいたい、

F a t e なのは
E X S S S

E D C B A
C B A A A
S -

つて感じか?」

和麻「対魔力も欲しかったな

作「ちよつとは自重しろよ」

和麻「自重？知らねえなあ！」

作「！」、「コイツは……」

和麻「まあ、落ち着け。ハゲるぞ？」

作「お前の所為だ！」

和麻「やれやれ、作者よ。こんなところで漫才をしている場合か？そろそろ挨拶して締めるべきではないかね？」

作「お前が原因だろうが！……ゴホン。えへ、ステータスに関しては「こんなところです。激しく厨一ですがこれからもよろしくお願ひします！」

無印設定（後書き）

主人公のステータスでした。てか、設定でさえも駄文ですね・・・。
見てくださった方に感謝したいと思います。
意見等ございましたら感想をください。これから執筆の糧とさせていただきます。

第一話（前書き）

作者「第一話をお送りします」

和麻「なんだ？意外と早いな」

作者「夏休みだからね」

和麻「ああ、なるほどな」

作者「それでは、始まります」

第一話

翠屋を後にした俺は、夜になるまで海鳴市を歩きまわった。本当は投影やらの練習をする予定だったんだけど、シアが散策を提案したのだ。

「あ～、足だりい」

（お疲れ様です、マスター）

「意外と広いのね、この街」

（そうですね）

「わざわざ帰つて寝たい・・・・あれ？」

（マスター、ビックリました？）

「いや、今気がついたんだけどさ。俺、ビックリ住めばいいんだ・・・・？」

（・・・・）

「あれー?シアさん!?

（・・・・頑張つてください）

「ちよ、待て待て!マスターのピンチなんだよ!なんか案とかないのー?」

(まあ、なるまいなるでしゅう)

「……はあ。先が思こせりやるよ」

なーんてことを話しながらひひひしてたらいつの間にか夜にな。ホン・今日の宿題みー・・・・。

(マスターへとおひる用意をしておこへべださこよー)

「わかつてゐよ。お前は俺の母親か。全く・・・・・ツー・

(マスターへ魔力反応ですー！)

「場所を特定！ナビ頼むぞー！」

(了解ー！)

俺はシアが頭の中に浮かび上がらせた地図をもとこ、走り出す。・・・・結構遠いな。移動術なんかがあれば楽なんだけどな。

(マスター、ないものねだりをして仕方ないですよー！)

「わーつてゐよー！」

心に思つただけで云ふのはちよつと問題だな。改良しないとい。

(マスター、次の角を曲がったらすぐですー！)

「あーみー！」

角を曲がった俺が見たものは、化け物とそれに追いつめられてる少^な女。

「あれヤバくない？俺の目が正しかつたらレイジングハート起動してすらないよね？」

（マスターの目は正常かと。あ、化け物が攻撃態勢に入りました。）

「サラッと言つなよ！？チツ、間に合^ハえよ！」

急いでなのはと化け物の間に割つて入る。

（よし、シア・コミッターを一段階リリース！魔力をランクAAで放出、障壁展開！）

（了解！コミッタリリース！ランクAAで展開！）

化け物に向けて右手をパーの状態で突き出す。化け物の攻撃は俺の張った障壁によって阻まれる。あれ？プロテクションいらなくね？

「ふえ！？だ、誰？」

「話は後だ。今はお前にしかできないことをやれ！」

「う、うん。あれ？どこかで聞いた声なの・・・」

さて、と。なのはが変身するまでは俺があいつの相手をするかな。

「さあ、化け物よ。相手は俺だ！心してかかってこい。投影、開始

トレース、オン

「！」

初めての投影だが、なかなかうまくいったじゃないか。よし、戦闘開始と行きますか！

「我、使命を受けしものなり 契約の元その力を解き放て 風は空に、星は天に そして不屈の魂はこの胸に この手に魔法を レイジングハートセットアップ！」

『スタンバイレディ、セットアップ』

干将・莫耶を投影し、しばらく時間を稼いでいると、背後から、レイジングハートを起動する声が聞こえてきた。よしよし、俺の出番も終わりだな。干将・莫耶を化け物に向かって投げて、と。

「壊れた幻想」
ブローカンファンタズム

投げた双剣は化け物に刺さり、爆発する。煙がはれると、動かなくなつた化け物が。

「いまだよ、なのは！」

「うん！リリカルマジカル！ジュエルシード封印！」

れて、封印も終わったことだし、撤収するとしまじょうが。

(シア、撤収するだ)

(挨拶はしないよろしこのですか?)

(あつひまだ氣づいてないからな。逃げるなら今のがだらう?)

(・・・・・まあ、そうですね。わかりました。撤収しまじょう)

(あつひさんが氣づく前に逃げ、「あー!待つてなのー!」ちいっーさー、へいりさんがあつひのな

「・・・・・何か用か?」

「ひ・・・。あ、あの、ありがとひざいました」

あり?もしかして俺だって氣づいてない?

(ちょうど街灯が壊れましたからね。おそらく暗くてわからないのでしょ(う)

なるほど。そりや好都合つてもんだな。

「気にするな。礼を言われるよくなことはしない

「で、でも、助けてくれたし……」

「だからここと離れていろ。……それからこれから離れないとまずいな」

「え？」

「周りを見ろ。じきに警察が来るぞ？」

周りは酷いあつたまだ。……まあ、原因は俺と化け物のせいだが。だって、化け物が縦横無尽に動き回るんだもの。俺は悪くないやい！

「は、早くどうにかしないと…」

「……じゃあ俺は行くから。気をつけ帰れよ？」

「え？ 行くってば」「へ？」

「家……と言いたいが、あいにくそんなものは無いのでね。今夜は野宿かな」

「ええ！ ダ、ダメなの！ 風邪ひこちゃうの…」

「やうは言われても、無いものは無いんだから仕方ないんだがな」

まあ、野宿は覚悟してたからいいんだけどさ。

「じゃ、じゃあ、私の家にくればいいの！」

あちゃー、また断りにくいくことになつたなあ・・・。

「い、いや・・・えーと。ほ、ほらー見ず知らずの人を簡単に泊めるわけにはいかないでしょ？」

「私の家は大丈夫なの！」

ですよねえコンチクショウ！士郎さんやら桃子さんが聞いたら「泊めてもいいよ」とか言つに決まってるよね。

「え、いや、あの、ええと・・・。やっぱり遠慮しまおわああああああああー!?」

痛てててて・・・。なんでこんな時に空き缶！？あれかー？運が
低いからなのか！？

「だ、大丈夫？・・・・え、和麻・・・君？」

ちょうど転んで着地したところが、街灯がついてるところで、見事なのはさんにバレることになりました。・・・・ふ、不幸だあああああああー！

あれから起つたことを話すか。顔がなのはにバレた俺は、なのはに半ば強制的に翠屋へ連れて行かれた。翠屋へ帰ったなのはは夜遅くに外出したことを怒られ、俺はなぜか歓迎された。で、部屋割りなんだが……。

「じゃあ、後は和麻君の部屋だけね」

「桃子さん」「はい！私の部屋がいいのー。」ちゅうと待てー。」

「あら、それはいいわね。じゃあ和麻君はなのはの部屋ね」「だから待てとーとか桃子さんー俺は男ですよー？いいんですか？自分の娘の部屋に泊めて」

「いいのよ。それになのはも嬉しそうにしてるでしょ？？」

「お、お母さん！／＼／＼

「あらあら。なのはつたらもしかして・・・・・」

「おお、なのがんにもついに春が来たのかー。・・・・・羨ましいなあ」

「こやああああああー？ひ、違うもん！／＼／＼

なんともまあ、騒がしい家族だな。でも・・・悪くない。やつ思っていると、不意に後ろから声をかけられる。

「お前になのはは渡さんー。」

振り返つてみれば、恭也さんが「王立ちして、俺に殺氣をぶつけていた。こええ。

「大丈夫です。そんなことしませんよ」

「それが本当ならいいんだがな」

相変わらず殺氣全開の恭也さん。殺氣って痛いんだね。

「じゃあ、和麻君。お部屋に行こいつ？」

「ん？ ああ。じゃあ高町家のみなさん。しばりへお世話になつます」

「…………」「よひしや、高町家へ」「…………」

「うひして、俺はしづらへ高町家にお世話をなる」とが決まった。

「……で、部屋についたわけなんだが」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。とりあえず今日はもつ休もう。なのはも疲れただろう？」

「うん、そうだね」

「詰せ畠田でもわかるからな。じゃねえ休む」

一連の会話をしながら床に布団を敷き、

「和麻君も一緒に寝るの！」

۱۷

今
・
・
・
・
なんて
?

「だから、一緒に寝るの！」

待て。繕ひに付けるか?」

一
う
ん

え」とその勘弁してほししなくて

「拒否権は無いの！」

「え、ちか、ちか」と待てーさ、やめないとおおおおーー。」

なのはつてこんなにアグレッシブだつたのか・・・・。俺、この先大丈夫かな・・・・。あ、ちなみに俺はあの後どうにかなのはを説

寝る前にいくつか聞いておきたいことがあつたんだった。シアまだ起きてるかな?

(なあシア?)

(なんですか?)

(起きてたか。いくつか聞いてもいいか?)

(ええ、なんなりと。あ、スリーサイズはダメですよ?)

(聞かねえよーなにが悲しくてお前らのサイズきかんにゃならんのだ!)

(冗談ですよ。で、聞きたことさせ~)

(つたぐ。まぢ一つ目だが、デバイスが無い俺にはジユエルシードの封印はできないのか?)

(できないことはないですが、負担がかかりますね。デバイスの補助が無いんですから)

(お前'りじゅうもならぬのか?)

(残念ながら無理です)

(わうか・・・、じゃあつづ。俺はこれからやがったらここと連
つ)

(わうですね・・・。当分はなのはさんと一緒に行動してジュエル
シード集め。それから期を見ていろいろと介入して、最後はハッピ
ーハンドドリ感じが一番ですね)

(わうか~。じゃあそれを基本方針でやるつか。うまくいけば、だ
けど。)

(わうですね。ですが、マスターはやるんでしづ~)

(もういい。お前らも頼りにこじてるからな)

(ええ、十分に頼つてくださいね?)

(ははっ、ありがと。じゃあそろそろ寝るわ)

(はー、お休みなさい。マスター)

念話を切つた後も、俺はこれからのことについて考えを巡らせて一
た。それは、俺が眠りに落ちる一瞬前まで続いた・・・。

第一話（後書き）

和麻「おい作者」

作者「なんだ？」

和麻「戦闘シーンなんでカットしたんだ？」

作者「いや、いるないかな」と思つて

和麻「いいのかそれで・・・」

作者「次はもちろんちゃんと書いてよ？」

和麻「そつしてくれ。それと、話を省略しそうじゃないか？」

作者「だつて・・・原作つる覚えなんだもん・・・」

和麻「オイ！」

作者「ちゃんと原作見直さないとな・・・」

和麻「しつかりしてくれよ

作者「了解」

和麻「では、また次回」

作者「最後に、このよつな駄文を読んでくださつた皆様に感謝を」

第三話（前書き）

作者「・・・・・」

和麻「どうした？」

作者「戦闘シーンが・・・書けん！」

和麻「いばつてんじやねえ！」

作者「と、言つわけで今回も戦闘〇ですがよろしくお願ひします」

第三話

夢を見ていた。

それは、俺がまだ と名乗っていたころ

変わることのない日常。刺激のない、退屈な生活

ふと、それが懐かしいと感じる

なぜ？ わからない

もしかしたら、俺は戻りたいのかもしれない

あの穏やかだった世界リラクゼーションへ

これから俺を待ち受ける“何か”に体が拒否しているのかもしれない

『「これ以上かかわると危ない』

だけど、俺は決めたんだ

やれるだけやるって決めたんだ

もう逃げないって、決めたんだ！

日の光が部屋へと差し込む。俺は眩しくて目を覚ます。

「なんだ・・・?なんか夢を見ていたよ!」

なんだつたんだろ?か。気になるが、思い出せない。まあ、夢だし、仕方ないな。

(おまけに)おまけ、マスター)

(ああ、おはよ)

シアと挨拶をして、俺は起き上がる・・・れなかつた。原因は言わずもがな、なのはある。いつの間にかベッドから俺の寝ていた布団まで移動してやがる。腕をがつちつホールドするおまけ付きでな!

(・・・・・ハア。シア、どうしたらいこと思ひ?

(・・・放つておいたらいかがですか?)

(それだと俺が起き上がれないじゃん)

(じやあ起きるまで待つのせいでですか~)

(それもなあ・・・。仕方ない、起こすか)

俺は仰向けだつた体を横にして、なのはの頬をつつぶ。お~、柔ら
け~。

「ふひゅ・・・・・。ひひこ・・・・・」

起きる気配ゼロかよ・・・。じやあ何してやうかな・・・。ツ
! 視線を感じる! ? 後ろか! 俺は首だけ回して後ろを見る。そして
俺が目にしたもののは・・・・・。

「やー、やしながら」ひりひりを見てくる、桃子さんと美由希さんだった。

「なのはつたら、大胆ね～」

「ホントだよ」

「うう・・・／＼／＼

あの後、なのはを起こし、先に着替えた後に、俺も着替えて一階のリビングに降りると、イジられて顔を真っ赤にしていた。でも、あながちまんざらでもないとう顔をしているような気がする。

一方、男性陣は俺がリビングに入つてくるなり強烈な殺氣を放ってきた。おいおい・・・一般人なら気絶するレベルだぞこれ・・・。

「和麻君、ちょっと道場までいいかな?」

「和麻・・・、お前を殺す!」

ちょ、怖つ！てか、恭也さん、中の人がダメだつてば！

「ちょつ、まつ、やめてええええええ！」

俺の声は、むなしく響くだけだった・・・。

「さあ、構える！」

「今回は、僕も参加させてもらひつよ」

子供相手に2：1かよ。しかも俺、剣技なんて知らないのに・・・。
仕方ないな、降りかかる火の粉は払わないと。

「・・・・わかりました。行きます！」

俺は渡された一振りの木刀を持ち、構える。今ここに、御神流VS
俺の戦いが幕を開けた。・・・負けフラグですね、わかります。

結果から言つと、負けた。まあ、御神流に勝てるなんて思つてもい
なかつたよ？あ、でも恭也さんは倒せたからよしとしておこう。ち
なみに俺は、恭也さんを倒したスキを狙われてあえなく撃沈。気絶
という強制睡眠に追いやられた。

(マスター)

(なんだ? シア。 てか、 気絶中でも念話はできるんだな)

(ニーズンしてる時だけですけどね。それよりマスター、さつきの試合見てましたよ?)

(見てたのかよ・・・・。あまり感想は聞きたくないな)

(あまり気を落とせない。マスターは魔導師であつて剣士ではない
んですから)

(まあ・・・やつだかど)

(ならば、いつまでノビていいのですか？マスターは自分ができる
ことをやればいいのでしょうか？)

(俺ができる・・・? ジュエルシードか?)

(ちやんとねがつてゐじやないですか。今日は平日、なのはれんは学校ですがジユエルシーで集めくらにならば簡単にできるでしょう?)

(・・・そうだな。ありがと、シア)

そうして俺は目を覚ます。ジュエルシードを集めるとという思いを胸に秘めて。

氣絶から復活して少し遅い朝食をとつ、台所に食器を持つてこと、桃子さんに呼び止められた。

「あつ、丁度いいところに！和麻君、ちょっといい？」

「はい、なんですか？」

「なんだね？。す」く嫌な予感がする。

「なのはがお弁当忘れちゃったみたいなの」

それを聞いた瞬間、俺はまわれ右をして走り出す。

ダツ！ 走り出す音

ガシッ！ 桃子さんに肩を掴まれる音

「ふふふ、逃げようと思つちゃダメよ？」

な、なん・・・だと・・・。さすがは戦闘種族といつたところか・・。
・。戦闘種族ではない桃子さんでさえここまでやるとは・・・。

「もちろん、引き受けてくれるわよね？」

「いや、待て待て！行き先つて学校だろ？部外者じゃ入れないんじ
やないのかー？」

「その辺のお任せするわ」侵入方法

いやこやこやこやこやーお任せつて言われてまーしかも自分で侵入とか
言つあやつてるー

「返事はイースかはこのどちらかよ

「拒否権ねえええええええええええええー！」

その後も頑張ってはみたが、押し切られて弁当を持っていくことに
なった。地図は書いてもらつたが、土地勘が全くないため、ものす
ごく不安である。

「はあ・・・・・、なんでこんなこと・・・・・

(まあまあ、いこじやないですか。お弁当を届けた後でジュエルシ
ード探ししましょつ)

「ああ。ついあれ？たしか俺つて封印作業できないんじゃ？」

(ええ、今までできませんでした。……これから先はジュークシードを見つけた時に話します)

「わづか。じゃあ見つけたりちゃんと話せよ。」

(元のところ)

「やれやれ。なあ、道に迷ひ合ひ合ひなんか？」

(はー。いいをまつすぐです)

しばらくシアのナビ通つに歩くと、大きな学校が見えてきた。あれがなの通う学校か……、パツと見セキユーリティが固そうだな。わづ、どうしたものか……。

(マスター、どうしたんですか?)

「え？ああ、どうせひとつセキユーリティを突破してのはのもとに行いつか考えた

(こやこやーなぜ突破すること前提なんですか！？普通に来客として)

てなのせさんを呼び出せばいいじゃないですか！）

「えへ、それだと面白くないじゃん。主に俺が。」

（マスターが楽しみたいだけですか！）

「わうだ。だつてなのはの驚く顔みたいじゃん？」

（ああ、頭が痛い……）

「落ち着け。半分は冗談だ」

（後半分はなんなんですか！？）

「お、あそこから入れるんじゃね？」

（無視しないでえええええ！）

さて、うまく校舎に潜入した訳なんだが・・・・。

「なあ、なのははって3年の何組だ?」

(知りませんよ、そんなこと)

「あちやー、聞こときやよかつた。ん?あれは・・・・」

俺の視線の先には、いつも見るなのはとその友達である「少女」一人の後ろ姿。おお、ラッキー!

(なんか出来過ぎてる気がします・・・・)

「気にするな。行くぞ!」

潜んでいた影から人気が少なくなった時を見計らってダッシュ!目標はなのは達が入つて行った教室!ではなく・・・・

(なんで屋上に来てるんですか?)

そう、俺が走つてたどり着いたのは屋上。そろそろ次の授業が始まるとから誰もいない。

「まあ落ち着けよ。理由は3つ。あの時教室に突入したらみんなから変な目で見られるだろ?それに、次の授業まで時間なかつたし。最後は・・・・」「

(あ、最後は!?)

「単にそうしたほうが面白そうだつたからだー。」

(私の期待を返せええええええーーー)

なんて、シアと漫才をしながら昼食の時間を待つのであつた。。。

Sideなのは

こんにちは、高町なのはです。今日は平日で学校なので、こうして授業を受けています。それにしても、和麻君大丈夫かな?私が学校行く前から気絶してたけど。。。。それにお母さんが、

「なのは、王子様を起こすにはね、キスをすればいいのよ

なんて言つからり。。。。いやーまた顔が熱くなつてきたの。。。

「なのは、大丈夫?」

「なのはちゃん、顔が真っ赤だよ?保健室行く?」

上からアリサちゃんとすずかちゃん。一人とも私のお友達なの。

「だ、大丈夫だよ

「ふうん、なのはがそつ言つならいいんだけど

「辛くなつたら早めに言つてね?」

「にゅはは、ありがとづ

そしてお廻り飯の時、それは起つたの。

「あ、あれ……？」

「なのは～。いつも通り屋上に……ひびきしたの？」

「……お弁当忘れてきりやったの？」

「なのはもデジねえ。とつあえず屋上に行きましょう。お弁当分ナハ
あげるわ」

「アリサちゃん、あつがとつー。」

「な、なこいつたのよ。ほり、行くわよー。もつかは先に行つ
てるか、」

アリサちゃんに手を引かれ、移動しようとした瞬間、窓のほうから
聞きなれた声が。

「よつ・・・とーなのはー忘れものでー！」

そこにいたのは、まぎれもない和麻君の人でした。

Side out

（それはここのですが、どうせ毎日だな。いつも、行きますかー。
「よつし、やうやく毎日だな。いつも、行きますかー。」

「そりゃ勿論……ガサゴソ……お、あつたあつた。コレを使って行くんだよ」

「いつ聞いて取り出したのは普通のロープ。

（どこから出したんですか！？それになんでロープなんて持つて……ハツ！）

「いやいや、違うから。シアがなに想像してるのかは知らないけど、間違いだつてことぐらいはわかるから。あ、どこから出したかは企業秘密つことで」

（そ、そんな……緊縛ブ……ハツ！わ、私はいつたい何を！？）

「さて、時間だ。さくっと済ませて探索だな」

（む、無視しないでえええええー！）

シアを無視して、屋上の手すりつぽこにロープを結んで……と。ラペリング降下なんてテレビでしか見たことないけど、まあ丈夫だら。

「さあ、行くぜ」

手すりつぽいものを乗り越えて足を壁につけ、ロープを引っ張つてまずは止まる。そつから注意して下に降りる。目標であるなのはの教室の窓の上で止まり、大きく壁を蹴つて飛び、空いていた窓へ飛び込んでロープから手を離し着地。我ながらうまくいったものだ。

「よつ・・・と。なのは！忘れ物届けに来たぞ！」

「和麻君！？え？え？な、なんでここに！？」

お、いい具合に混乱してから、しきる。面白いな、やつぱり。

・・・・・ん?なんだ?」

なのはに名前を呼ばれた瞬間、周りから殺氣を感じた。え！？なん
で？俺何かした？

(なのはさんがマスターを名前で呼んだからじゃないですか?)

(それでも殺氣を放つてぐるわはおかしかったN!)

(たのにはなんに品愛してすかされ)

(なるほど理解した)

。そろか、なのは、てモテるんだな。
確かに、口にいとは思ひか・・・

「和麻君！」

「ひやい！？」

うわ、考え事してたから声がひっくり返つちまた・・・。

「えと・・・・ありがとう／＼／＼

真っ赤になつてお礼を言ひなのは。くつーあ、あぶねえ・・・、もう少しでお持ち帰りしてしまつといひだつたぜ・・・。

「あ、ああ・・・。じゃあ俺はこれで。邪魔したな」

そう言い残して、颯爽とロープを這つて下りていへ。うわ、今思い返すとすげえ恥ずかしいことしたな、俺。

(今まで自覚なかつたんですか・・・)

余談だが、和麻が去つた後、和麻のことについてなのはに質問が集中し、クラスが軽いパニックになつたとか。

学校をでた俺は、ジュエルシードを探すために歩きまわることになった。

「なんか、あんまり腹減らないな」

(ああ、それ私が抑えてるよ?)

「マシでー? 食欲とかも抑えられるのー?」

(ある程度はね。でも抑えると後でその反動がくるから使い勝手はイマイチかな)

「なんせ。じゅあ今日またのまま持えておこしてくれ」

(ア解)

わいつと、アリハあるかな。

「あへ、シニア? 見つけたんだが・・・」

(え? エリエリエ?)

「セレの電柱の下」

(あ、ホントだ)

「で、どうやって封印して回収するんだ?」

(んじゃ教えようつか。まずは久しぶりにレンをゴーリン・アウトさせて)

「ここのか? それじゃコモリターが・・・」

（だいじょぶだいじょぶ。私とレンで3ランクずつ受け持つてると
ら、レンを外しても3つしか上がらないよ）

「 3つ……つてことはウランクまで解放つてことか？」

() セットアップ。じゃあレンを融合解除して

了解。レン、ユニゾン・アウト

あれ? や二とあたしの出番かい?」

「……………」「……………」「……………」

(では次に、レンを得機状態にします)

「待機状態あつたのか！？・・・・とりあえずやってみるよ。レン、待機状態に戻れるか？」

ああ、あれを使うのかい。いいよ、モードリース！」

レンがそういうつた瞬間には、すでに彼女はいなくなつており、レンが立っていた場所にはペンダントが落ちていた。

(「ソーベンタンが待機状態なんです。でも、ソーベンタンを拾つて『モード一セットアップ』と言つてください）

「ほかにも機能があつたのか・・・・。よし-レン、モード1、セツトアップ！」

《やれやれ、しょうがねえなあ》

あ、そこはレンのままなんだ。

「しょうがなってビリビリ……っておわー！」

ペンドントはその形を変えていく。これは……例えるならFF？のガブレード（スコールのやつ）か？いや、例える必要すらないな。だって全く一緒だし。

「シアーハー、これは一体ビリビリだ！？」

（それが私たちのアームド形態ですよ。そうですね、言ひなれば私たちはただのユニゾンデバイスではなくアームド・ユニゾンデバイス、といったところでしょうか。ちなみにその形になつたのはマスターの記憶からデバイスに最適な武器を探したからです）

「アームド……ユニゾン……？」

（はい。名前の通り、アームドデバイスであり、ユニゾンデバイスでもある存在。世界でただ一つ、マスターの為だけのデバイスです）

「俺だけの……」

（そうです。さあ、封印しましょ。やり方は簡単です。レンに封印の指示を出すだけです）

「……レン、ジュエルシード封印。頼めるか？」

《まつかせなさい》

「・・・よし...ジユエルシード、シリアル?封印!」

『オーライー』

無事に封印されるジユエルシード。しかし、封印つて大変なんだな。

(お疲れ様です、マスター。初めてにしては、上出来でしたよ?)

「わっしゃ、お前らのサポートがあるからな」

(ふふっ。では、次に行きましょう。レンはちやんと待機状態にしておいてくださいね?)

「わーっとるよ。俺だつて銃刀法違反で捕まりたくない」

(よひしー。あ、そうそう、私たちにはカートリッジシステムも付いていますので)

「やれやれ・・・。お前らは非の打ちどころがない、完璧なデバイスだよ。俺にはまつたいなこくらいだ」

いつじて、俺達のジユエルシード探しが始まった。

第三話（後書き）

いつも、作者です。今回、和麻は探し物で忙しいので、私一人でどうかを進めていきます。

えへ、今回はシアとレン、2人の秘密が明らかになっちゃいましたね。アームド時のガンーレードでは、作者がFF?が好きだから出しちゃいました。

最後にこのような駄文をここまで読んでくださった皆様に感謝を申し上げます。

・・・原作キャラの口調が難しい。

第四話（前書き）

作者「原作通りって難しいね」

和麻「何をいきなり」

作者「もう口調とかさっぱりだよ」

和麻「もう一回アニメ見るなりして勉強しろ」

作者「だよね。まあ、頑張るけど」

和麻「頼むよ？じゃあ、始まるぜー！」

あれから町中を探し回った結果、俺はジュエルシードを三つ回収することができた。

(マスター、お疲れ様です)

「ああ、お疲れさん。レンもありがとな」

『まあ、これぐらい余裕よ』

(今日で三つも見つかるのは幸先がいいですね)

「全くだ。さて、もう夕方だし、帰りますか」

(ですね。じゃあレンとコニゾンをしてください)

「・・・なあ、待機状態のままじゃダメなのか?」

(あまりオススメはしませんね。まだマスターは未熟ですから、Sランクでも魔力が暴走する恐れがあります)

「そつか・・・俺も頑張らないとな。レン、コニゾン・イン

『はあ~い。じゃあまた何かあつたら呼んでね~』

なにげに、レンって一番楽なポジションだよな。。。あれ?これ回収したら神社でのレイジングハートの自動起動のシーンがなくなるんじゃ?・・・まあ、いいか。

「ただいま～」

「おかえりなや～」

家に戻ると、なのはが出迎えてくれた。

「今日はお弁当持ってきててくれてありがとう」

「なんのなんの。おかげで面白に顔見せてもらひたからな」

「む、むお～～」

手洗い、うがいをしてコビングぐ。そして、面白いものを見つけたと喜うような顔をした桃子さんとなにやら申し訳なふりにしているなのはがいた。

「ただいま～・・・・・どうしたんですか？」

「つふふ。和麻君、なのはの彼氏になつたんですね？」

「・・・・・・へ？」

「あら？違つの？なのはがそんなことを言つからってもつ・・・・・

待て待て待て。これは一体どうしたことだ？俺の知らない間に何があった！？

(マスターって、フラグメイカーだったんですね)

(こやこやいやーそんなフラグ立てた覚えはねぇからー…)

(・・・無自覚ですか。最悪ですね)

(お前ひむわいよー…?)

「えへっと、なのは。どうこういとだ？」

「え、えとね。今日和麻君が教室から出て行った後のことなんだけ
ど……」

S.i.d.eなのは（回想）

和麻君がお弁当を持ってくれました。でも、窓から入ってくるのはちょっとどうかと思うの。おかげでびっくりした顔を和麻君に見られちゃった・・・。ひつ、恥ずかしい・・・。

「…………た、高町さんー今の人って誰ー？」

クラス中からそんな声が聞こえてきました。にやはは・・・・、や
つぱりそつなるよね。

「あの子は和麻君って書いて、私の家で一緒に住んでるの」

「 「 「 「 なッ！ なんだつてーー。」 」 」

男子「つるせこの。

「 和麻君かあ～。カッコよかつたよね～」

「 だよね～」

「 うんうん～」

「 ねえ、高町さん。彼ってこくつ？」

「 ふえ？ 9歳だって言つてたよ？」

「 同い年！？」

「 同い年にしては大人っぽかったよね～」

「 うんうん。・・・もしかして高町さんって彼と付き合つてゐるのかな？」

「 ・・・気になるね」

「 聞いてみよつか」

「 だね。お～い高町さん」

女子3人組が屋上へ行く準備をしていた私のところへやつてきました。なんだろう?

「ねえねえ、高町さん。彼とはどうこう関係なの?」

「ふえ? 彼って……和麻君? な、何にもないよー?」

「ほんと? なんかアヤシイなあ~」

「ほ、ほんとだってば! わ、私約束があるからーじゃあねー!」

あ、危なかったの。だって、一緒に寝たなんて言えないし……。

「あっ、やつと来た! なのは、遅いわよ!」

「う、めんね。クラスのみんなに捕まっちゃったの!」

「さつきの男の子のこと?」

「う、うん」

「やついたら気になるわね。あいつ一体何者なの?」

「教えて、なのはちやん」

親友のアリサちゃんとすずかちゃんと聞かれたので、私は魔法とかのことは隠して話したの。

「へえ、そんな」とがあつたんだ」

「じゃあ和麻君・・・だけ?はなのはちゃんのお家に住んでるの?
?」

「うん、そうだよ」

「なのは、そいつに何かへんことされなかつた?」

「ふえ？ 何もないよ？」

したのは私・・・なんて言えないの！

「そつか、よかつた。何かされたらすぐに言いなさい?」

「うん、あつがうり、アリサちゃん」

「べつ、別にお礼なんていらないわよ！」

私たち3人は楽しくお弁当を食べました。この後に待ち受けることに気づきもしないで・・・・。

それは、教室に帰った時のお話でした。

「あつ、高町さんー聞いたわよー、さつき窓から入ってきた人って高町さんの彼氏なんだって？」

「ふえ！？え？え？ふええええええええええええー！？」

「あ、あれ？違つのかな？聞いた話ではそうだつたんだけど……」

わ…私と、かつ…和麻君が恋人！？で、でもアリカなあ／＼

「ちよつとなのはーなに大きな声出してんのよー」

「ア、アリサちゃん……」

「なに？どうかしたの？」

「あのね……」

かくかくしかじか四角いム(ゝゞ

「なのはがねえ……。でも、いいんじゃない？好きなんでしょう？」

「う、うん……」

「ならここじゃない。ねえ、おかか？」

「うそー。」

「で、でも……和麻君が私の事ビービーチーか分からなこから……」

「あのねえ、なのは。そこがなのはの事嫌いだつたら、わざわざお弁当なんて持つてこないでしょ？」

「うそだよ、なのはひやん。もつと自信を持たないと」

「うそ、うそだよね。ありがとう。すみかちやん、アリサちゃん」

Side out

「…………とこわけなの」

「あぢやー、マズったな。やつぱり呼び出してもひべうだったか。

「なるほど…………分かったわ。じゃあ…………」

やつぱり俺のまつを見た桃子さん。つわ、この状況を楽しんでや

がるよ」の人。

「今」Jで答えてもらひましょつか。ね? 和麻君」

やつぱり来たか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、あはははは・・・・・。答えないダメですか?」

「 もうらん 」

「和麻君は私の事・・・・・嫌いなの?」

くつーその聞き方は卑怯だ。

「・・・・・嫌いなわけないだろ」

「え・・・・・、じゃあ・・・・・」

言つてから気づく。俺はなのはの事が好きなのか?確かに、俺の気持ちの中にはなのはが好きだという気持ちがある。だが、それは本当の想いなのか?・・・・・分からない。

「確かになのはの事は好きだよ。でもね、それが恋心とかなのかなどうかは分からんんだ」

「じつやら脈はあるみたいね、なのは

「うそー。」

あきらめる気はないのね・・・・。嬉しいけど、なんかちょっと複雑

だな。

「あ、そうだ。和麻君、お風呂沸いてるから先に入つてきただけ?」

「風呂ですか?じゃあお風呂葉に甘えて」

今日は一日中外について、しかも封印なんて体力のこも作業してたら汗だくなんだよね。

ザボーン

「はあ~、生き返る~」

(オヤジ臭いですよ、マスター)

「ほつとけー俺は風呂が好きなんだよー」

(金く・・・。ツーマスター、誰か来ます)

「IJWちにか? 一体誰だ?」

士郎さんか?いや、士郎さんは厨房にいたはず。じゃあ恭也さん?それも違うな。道場から二人分の声が聞こえてたから。だから美由希さんも違う。じゃあ誰だ・・・?

「え、えと。お邪魔します……／＼／＼

なのはでしたー。つて……えええええー!?

「なつ、なのは!? なんで!?!ー.?」

「お母さんが『和麻君の背中を流してきなセ』って……」

また桃子さんか……。

「ほり、和麻君! こっち来て座つて!」

・・・・逆らわないほうがよさうだな。あ、なのははちやんとタ
オル巻いてるよ?

「わかったわかった」

俺はなのはのもとに行き、椅子に腰かける。泡たっぷりのスポンジ
を持ったなのはが近寄ってきて、背中を洗い始める。・・・・なか
なか気持ちいいな。

「和麻君。ど、どう? 気持ひい?」

「ああ、気持ちいいよ」

「えへへ・・・」

(なのはまじでレーベですな)

(テレテレすきて逆に怖いんだけど・・・)

(「このまま進むとヤンボレ代するかもしされませぬね）

(ハヤレヒナリとかり上めぬ)

「はこ、晝戻終わったよ」

「ああ、やさわす。お返しに俺がなのはの晝戻洗つてやるが」

「ふえー…アドバイス…・・・・・お、お願ひしまやす／＼」

「ふふふ・・・なのほじせ懸いが少し樂しませんかかな。

「やあ……あん……はあ……はあ……んっ」

あれ？おかしいな・・・。俺はただなのはの背中を洗つてゐただけなの？、どうしていつになつた？

(変態ですね、マスター)

(ちよつと待て…なんぞやうなる…?)

(年端の行かない子にそんな声出でせるなんて変態以外いないでし
ょううー)

(なんか酷い！俺はいたつて真面目なの）・・・・・

とつあえずシャワーで泡を落として・・・つと。

「お～い、なのは？大丈夫か？」

「ふあ・・・うん。なんとか・・・・・／＼／＼

「すまん。ちょっと調子乗った」

「ううん、いいの。私は大丈夫だよ」

(会話だけ聞いてると事後のよつですね)

(ぐだらん)と嘔(う)なよー)

(まあまあ。そろそろ上がったほうがいいですね。結構時間も経つ
てますし)

(了解)

「なのは、そろそろ上がりないか？」

「や、そりだね・・・・・／＼／＼

「どうした？顔が真っ赤だが・・・・・のぼせたか？」

「だ、大丈夫なの。先あがつてるね！」

あ、行つちまつた。仕方ない、もう一回遅まつてから出よ。

夕飯を終えて、なのはの部屋へ。風呂の一件はもちろんからかわれ

ましたよ？ですがに俺がなのはを洗つた時の事は話してないけど。

「はあ／＼／＼／＼

「え／＼と、なのは？」

「いやー、なにかな？」

「いや、ずーっとボーッとしてるから」

「え、そんなにボーッとしてた？」

「うん、10時からだから・・・かれこれ1時間くらい

「ええー？ そんなにー？」

「それより多いかもしだな・・・ツ！ 魔力反応！？」

「これはジュエルシードだな。場所は・・・・学校？」

「なのは、ジュエルシードだ。場所はなのはの学校だよー。」

あれ？ コーノいたんだ。すっかり空氣だつたな。

「うんー行こう、和麻君、コーノ君。」

そういうえが俺となのはでの初出陣か。・・・・飛行魔法が欲しいな。

「ところどなのは、ここからどうやって行くんだ？」

なのはの部屋は一階である。

「ん~、コーノ君、どうすればいい？」

「やうだね・・・飛ぶ、のはちょっと危険だから歩いていいのか

「だな。じゃあ先に降りる。なのはは後から飛び降りる。受け止めてやるから」

そう言い残して窓から飛び降りる。一階から飛び降りるくらい、今
の身体能力なら余裕だな。

「よし。なのは、降りてこー」

「う、うん。行くよ」

飛び降りたなのはを受け止める。思ったよりも軽いな。

「よつと。じゃあ行くぞ」

「リリカル、マジカル！ ジュエルシード、シリアル²⁰？？！ 封印！」

『シーリング』

「はあ・・・はあ・・・」

「なのは、お疲れ様」

「お疲れ。大丈夫か？」

「うん、なんとか・・・」

「フラフラじゃねえか。ほら」

なのはを背にしてしゃがむ。

「だ、大丈夫だよ」

「うぬやこ。フカフカしたやつは元気われたくないな。せり、サッサとすみ」

「うう……じやあお願こなの」

「あじよつと。お前はもつ寝てろ。ベットには運んでおいてやるから。明日は休みだろ？」

「うそ…………すう…………」

「やれやれ。封印で体力根こそぎ奪われるようじやあまだまだな

「え？ 和麻さんは封印したことがあるんですか？」

「敬語は止める。今日まつ封印してきたが？」

「ええ！？ 和麻さんって魔導師なんですか！？」

「いじやっ？」

「じゃあ一体どうせつて…………？」

「ユニー……企業秘密だ」

「や、そんなことわざず教えてくださいよ～

「だから嫌だと……、『めり家だれ』」

「話を逸らさないでくださいよ～」

しつこになこの淫じゅ・・・あれ? ゴーノが淫獣だとすると、なの
はと一緒に寝たり、風呂に入つたりしてゐ俺つて・・・。いや、
ダメだ。考えるな!

「あ～、ゴーノ。ちょっとといいか？」

「なんですか？」

うわ、露骨に怒つてやがる。

「いや、あのね・・・。部屋にどうせひいてあがればいいこと思つ?」

「あ」

小一時間ほど考えた挙句、俺が最近使わないからすっかり忘れていた投影を使って繩梯子を作ることで無事に部屋に入ることができた。ちなみに、投影を見たユーノ君はびっくりしていた。

部屋に入り、背負っていたなのはをベッドに置く。

「よいしょ・・・つと。ふう、これでよし。さ、寝よ。おやすみ、

구
1
ノ
」

「あ、はい。お休みなさい」

床の布団に転がる。たゞたゞ、畳口はまづなる」とやう。。。。。

第四話（後書き）

作者「全く先に進まないな」

和麻「誰の所為だよ・・・」

作者「フェイドが出るのはもうちよつと先になるかもな」

和麻「だらうな。原作通りだと、次はサッカーか？」

作者「だな。できれば、もう一つ進んでフェイド戦までいきたいんだが」

和麻「ま、あんまり無理すんなよ?」

作者「ありがと。ではまた次回」

和麻「ところで作者、よくも俺にあんな恥ずかしいことさせやがったな?」

作者「恥ずかしい・・・?ああ、風呂か?」

和麻「そうだよーおま、あれはちとマズイぞ?」

作者「はははははははは、こまからそんな」と言つてると後が持たないぞ?」

和麻「止めろって言つてんだらつが！喰らえー約束された勝利の剣
！！」

作者「ちよ、待てー、ああああああああああああああー！」

和麻「フツ、悪は滅びたぜ・・・」

第五話（前書き）

作者「そういうや和麻つて、もらつた能力ほとんど使ってないよね？」

和麻「誰かさんの所為でな」

作者「あはは……。ま、まあこれからは戦闘入るしさ。出番ならい
くうでもあるよ」

和麻「そうであることを祈りつ。では、第五話、始まるぞ」

8／9 一部を大きく改訂

第五話

学校でのジュエルシード封印から一夜明けて、今日。今日はなのはの学校は休みなのだが……。

「ほり、なのは。いい加減起きろって」

「今日は学校お休みだから、もつもつとお寝坊させて～」

こんな状態である。

「つたぐ・・・・。ほり、起きろー。今日はサッカーの試合かなんかの応援に行くんだろ?」

「ここやー! さうだったのー! あれ? なんで和麻君が知ってるの?」

「せつや士郎さんから聞いた」

これは事実である。原作知ってるから、とこののは理由はできないからわざわざ士郎さんから聞いてきたのだ。

「ほり、せつやと着替える。俺はトイレにいるからな」

「はあーーー」

なんか妹を世話してゐみたいだ。そんな経験は一度もないが、なぜかそう思える。

階段を下りて、リビングへ。そこで準備をしてくる士郎さんとバツ

タリ出会いつた。

「あれ？ もう行くんですか？」

「ああ、僕は監督兼オーナーだからね。先に行つておくれのさ

「俺も後で見に行つてもいいですか？」

「もちろんだよ。なのほど一緒に来てくれるかい？」

「はい、分かりました」

「うん。じゃあ、行つてくれるよ」

「いってらっしゃい、士郎さん」

士郎さんを見送る。朝ご飯はもう食べたし……あ、サッカーの試合つて何時からなんだろう？

サッカー場

あれからなのはを起こし、準備をしてからサッカーの試合会場までやってきた訳なんだが・・・。

「なのは、おはようー。」

「なのははちやん、おはよう

「すずかちやん、アリサちやんーおはようー。」

なのはの友達である月村すずか嬢とアリサ・バーニングス嬢がいらっしゃった。ヤベ、絶対昨日の事で何か言われるぞこりや。

「あら?なのは、そちらの方は?」

「ふえ?アリサちやんは昨日見てるよ?」

「おや?バレてない?

「え・・・・、じゃあまさか・・・・?」

「うん、和麻君だよ?」

まあ、そうなるわな。バレないでそのままなんて無理だろ?。 . . 。
とつあえず適当に挨拶しておくか。

「じつも、はじめてまして・・・でいいかな?終和麻です。よろしく
ね

自己紹介を、俺ができる限り丁寧にいっぱいのスマイルと一緒にしてみた。

「う・・・／＼は、はじめまして。アリサ・バーニングスです」

あれ？ なんで顔が真っ赤になってるんだ？

「顔が真っ赤だけど、大丈夫か？」

「・・・ツ！ だ、大丈夫よ！」

おお、持ち直した。

（マスターは自分の笑顔の威力をもつと知るべきです）

（なんのことだ？）

シアの言つことがさつぱり分からぬ。笑顔の威力？ ビックリ

ちや。

「えと、月村すずかです。えと・・・」

あ、そう言えば俺の年齢言つたつけ？ ついつい礼儀正しくやつちまつたが・・・。それの所為で声がかけづらいのならどうにかしないと。

「えーと、月村さん？ 俺も9歳だからさ、そんな遠慮した話し方しなくてもいいよ？」

「は、はい。『めんなさい、なのはちゃんから年は聞いてたんですが、実際会つどつしてもその・・・』

「あ～それわかる。なんか年上っぽいよね、主に雰囲気が」

「アリサ嬢。俺そんなに老けてるのか・・・・？」

「あの、よかつたら和麻君って呼んでもいいですか？」

「ああ、もちろんだ」

「じゃあ私は和麻って呼ぶことにするわ」

「いきなり呼び捨てかよ！まあいいけど。じゃあおれもすずか、アリサって呼ばせてもらうだ」

「一人ともお嬢様なのになんでこうも性格が正反対なんだろ・・・。

「ほら、そろそろ試合が始まるよ？」

「ちやんと応援しないと、ね？」

「うんー」

「ほり、ユーノ君おいで」

なのははユーノ君を肩に乗せる。あれ？原作と場所が違うな・・・。
まあいいか。

そして、試合は始まつた・・・・。

ペペーッ！

甲高く鳴るホイッスルの音。どうやら怪我人がでたらしい。なかなか激しい試合だからな、けがの1つや2つはあるだろう。ここで控えと入れ替えか？と思っていた時、士郎さんから声をかけられた。

「和麻君。君、サッカーをやったことはあるかい？」

「和麻君、がんばってなのー！」

「和麻ー、しつかりしなさいー！」

「和麻君、頑張ってね～」

なのは、アリサ、すずかの応援を受ける。え？俺がなにしてるか？怪我したやつの代わりにサッカーでてるよ？

「やれやれ・・・つと」

飛んできたボールをトラップして落とし、ドリブル。フェイントを使つて相手を翻弄し、脇を抜ける。一人、二人、三人……。気づけばゴール前、この空間にはキーパーと俺の二人だけ。

「はっ！」

軸足である左足に力を入れつつ、利き足である右でボールを思いつきり蹴る。ボールは狙い違わず、ゴールに突き刺さる。まずはこれで一戻。

「和麻君すごいの！」

「へえ、なかなかやるじゃない」

「和麻君、すごい……」

三人娘にもどうやら好評みたいだな。え？なんでそんなにやる気なのかつて？それはな……。

（回想）

「和麻君。君、サッカーをやったことはあるかい？」

「へ？ありますけど……」

「丁度良かつた。実はね、さつき怪我した子の代わりに試合に出てほしいんだ」

「ま、待ってください！控え選手がいるはずでしょう？」

「控えの子は朝、風邪をひいたと連絡があつてね・・・」

「それでも、部外者の俺が入るのはマズいでしょうー?」

「ああ、それなら大丈夫だよ。向こうの監督の了承はもらったから」

「万策・・・尽きたか・・・。」

「お父さん、どうしたの?」

「ん?ああ、和麻君に試合に出でてもいいようにお願いをしてたんだ」

「ふえ!?和麻君、サッカーできるの?」

「一応、人並みには」

「どうだい?でてくれないかい?」

「・・・条件がある。たしか怪我したのはフォワードだったな」

「そうだよ」

「じゃあ、俺が一回ゴールを決めるたびに翠屋のケーキ一つ。もちろんホールで」

「分かった。その条件を飲もう」

「やれやれ、じゃあ行きますかね。あ、ゼッケン貸してください」

（回想終）

つてことがあったのや。ちなみに俺は甘党である。

「さて、もう一本行きますか！」

結局、俺は4ゴールをしてチームを勝利に導いた。

「いや、すういね。どうだい？チームに来ないかい？」

「いえいえ、俺なんてまだまだですよ。お誘いはありがたいですが、お断りしておきますね」

「ううむ、もつたいないな」

誰が何と言おうと、もう俺はサッカーをやる気はない。

（なにかサッカーに嫌な思い出でもあるんですか？）

（前世でちょっと、な）

（詳しく聞いても？）

（聞いても面白いし大したことない話だが・・・まあいい。昔の話、小学生のころだったな。その時俺はとあるサッカークラブに所属していたんだ）

（前世からサッカーをしていましたか。それならさつきの動きにも納得がいきます）

(そういうかい。話を続けるが、そこの監督があんまりいい奴じやなくつてな。しうつちゅう怒鳴られてたんだ。それでイヤになつて止めた)

(・・・・・へ?それだけですか?)

(もうだけど？)

(うわ！なんだよ急に！)

（なんだよ急に！、ではありますん！いつになくシリアスな感じだつたから話を聞いてみれば・・・。オチが酷いですっ！）

（だから言つたろうが。面白くもないし大した話じゃないつて）

(その前振りの所為です！・・・・はあ、もういいです)

(・・・・?なんだよ、全く)

シアの奴どうしたんだ?俺にはさっぱり分からん。

「さて、士郎さん。約束は守つてもらいめますよ?」

「あはは、分かってるよ。おーし、みんなよく頑張った！いい出来

だつたぞ！練習通りだ！」

「……………」

「じゃあ、勝ったお祝いに、飯でも食うか！」

フ フ フ フ フ ハ ハ ハ ハ ハ

さて、あれから士郎さんと翠屋JFC（チームの名前。さつきなのはが教えてくれた）と三人娘、それから俺は、勝利のお祝いということことで翠屋に戻り、昼食をとることになった。

「すゞいじやないの、和麻！」

「うんうん！ カツコよかつたよ！」

「さすがは和麻君なの」

「あはは・・・ありがと」

止めて！そんな尊敬の目で見ないで！動きが体に染みついてるだけなんです！

「そういえば和麻つて学校には行つてるの？」

「あ～、行つてないよ。」

「ダメじゃなー。やめと行かなこと。」

「い、いや・・・。これにはけよつとした訳が・・・。」

「あら、どんな訳のかしら?..」

「もっ、桃子ちゃんー?..」からいたんですねかー?..」

「あ～、行つてないよ。」あたりかしら

「そ、そりですか・・・。じゃあ、お話をすみ

れひとつ、どうぞおあづかなかな。

(仕方ないことはない、無いことをやめるよつてのは罪悪感がありまますね)

(仕方ないだろ・・・。よーし、想いつた)

「実は・・・。俺には両親がいるんです」

「『わ～、イキナリ爆弾を落としましたね～』

(うわ～。要はインパクトだよ、インパクト)

(それは違つと思ひます……)

「あ、最初つからいないわけじゃなくて……、俺が5歳の時に交通事故に巻き込まれて……。それで俺をかばつた両親は……。」

なるべくつらそうな顔をして話す。たしかにこれはキツいな。罪悪感をひしひしと感じじるよ……。

「ストップーもう二度とわ。……『めんなさい』ね、辛いことを思い出させて」

「いえ、いいんですよ。……それには達也、高町家のみんなにも会えましたしね。それだけで俺は幸せ者ですよ」

一カツと笑つて答える。あれ? 3人娘の顔が赤いよつな……。

「無理しちゃダメよ? 和麻君。」ここまではつまでもいいからね

「はい、ありがとうございます……。桃子ちゃん」

ひつひつて、俺は高町家とまた一步親密になつた、気がした……。

あ、条件のケーキはアリサ達のお土産に1ホールずつあげましたよ? それでもまだ2ホールあるし……太つたらどうしよう……。

そんなこんなありまして、昼食会はお開きとなりました。あれ?なんか忘れてるような・・・。

(マスター、微かですが魔力反応があります。ねらいへジュエルシードかと)

(おお、やうだー!ジュエルシードだ!今だれが持つてる?..)

(え~・・・。やつをキーパーをしていた子ですね)

(やうか。だとすると回収はちょっと難しいな。)

(ですね。どうしますか?)

(様子見。発動したら封印しちつ)

(了解です、マスター)

様子見とこつのは半分ウソだ。この世界は原作と違つて、なのはがほとんど魔法を使つてない。だから、今回の事件で意志を固めてからつてこつ狙いもあるのだ。

(マスター・ジムホールシードが発動しましたー)

(ああ、いちでも反応を捉えた)

(なのはさんが先に向かったみたいですね)

(やうだな。じゃあ俺らも行くか)

(任せのまま)

「ちよっと出でますー。夕飯こは戻りますねー。」

「ほーい、気をつけていいくのよー。」

「うわあ・・・。思ったよりも酷いな」

(ですね。・・・なのはさんはあのベルの上のようですが)

「じゃあなたのほうが見える位置まで移動しようか」

(では、あなたのベルがよっこかと)

「お、いいね」

シアが指定したビルの屋上へ上がる。おお、よく見えるな。

(おや？なのせかごあの位置から封印を行つよひすよへ・)

「普通なり無理だと思ひだらうな」

(こえ・・・、わがこのなはさんでもあの距離からは厳しこと思
いますよ?)

「ふふっ、まあ見てるって」

原作通り、なのはは無事にジュホールシーードを封印した。俺がなのはのこるビルの上にたどり着いた時には、すでに意志は固まつたのか、とてもいい顔をしたなのはがいた。

S.i.d.e.シア

私は遠距離から封印しようとしているなのはさんを見つけた。普通ならばあの距離での封印はほぼ不可能なはず。まして、魔導師になつたばかりのなのはさんでは特にだ。

「普通なり無理だらうな」

マスターはやうござります。それではあるでなのはさんが封印に成功

かるよつた言ひ方ではないですか。

(「え・・・、わがこのせんでもあの距離からは厳しこと思
いますよ~。」)

これは正当な判断だ。別になのはさんを貶したりしたい訳ではない。

「ふふっ、まあ見てるわ！」

分かりました。ですが、もし封印できなかつたらどうなるか分かつ
ていますね？

・・・驚きました。まさか封印に成功するとは、思つてもみませ
んでした。なのはさん、あなたは一体・・・?

Side out

「よう、なのは。封印御苦労さま」

「あ、和麻君ー。」

「悪いな、手伝えなかつた」

「ううん、いいの。私にもできるんだから」

「やうか。じゃあこれ、渡しておくれ」

取つ出したのは三つのジュエルシー_ズ。俺が探したやつだ。

「ふえー? で、でも・・・・・」

「まあ、持つててくれ。俺には必要なものだからな

「うん、分かったの

「さて、帰ろうか。桃子さんも心配するだらしからな

「うそー!」

そう言つて、俺の腕にしがみついてくるのは、・・・・・まあ、今
田だけはいいが。

第五話（後書き）

作者「なあ、和麻」

和麻「なんだ？」

作者「なんかさー、話が進むたびにグダグダになつてゐる気がするん
だが」

和麻「……氣のせいじゃないと思つ」

作者「だよね～……。仕方ない、次話からはいらない所カットです
つと主人公視点にしよう」

和麻「それは面白味がなくなるから止めて」

作者「むう、どうやつたらグダグダにならないものが書けるんだろ

1

和麻「知らん。それはお前の仕事だろ」

作者「和麻が冷たい！？反抗期か…………」

和麻「ほう、いい覚悟だ。相当死にたいと見えるな」

作者「へへ、ちよ、ちよっとかわやあああああああーーー」

和麻「フツ、鎧袖一触とはこのことか……」

第六話（前書き）

「いつも、作者です。」

今回やつとフローティングを出すことができました。ですが、相変わらず黙文のままです。「」を承ぐださー。」

それでは、じいちゃん。

第六話

田羅口にサッカーの試合にてから早一週間、今日は週末でお休みなので、すずかの家にお邪魔することになつてゐる。なんで俺もかとこつと、すずかに招待されたからだ。まあ、招待されなくとも近くまで行くけどね。だってフェイト見たいじゃん？

ちなみに俺はこの一週間は投影の鍛錬してたよ？家で「ロロロ」としてた訳じやないよ？ゴーノに結界魔法を見せてもらつて複写眼で「ロロロ」させてもらつた。ゴーノのやつ、最初驚いてたな～。

「お～い、なのはー早くしないと置いてくぞ～

「「いや！？」待つてなの～」

ちなみにだが、一緒にいく予定だった恭也さんには先に行つてもらつている。

(「うひ～え～ば、やけに嬉しそうですね）

(ん？ああ、やう言～えばお前には原作知識が無かつたんだよな。すっかり忘れてた)

(原作・・・?)

(ほえ～、「わかには信じがたいですね）

(「この前の封印の時がいい例だろ?俺はその先に起る」とを知ってるんだ)

(なるほど……でもそれって何か卑怯じゃないですか?ネタバレみたいで)

(まあ、確かにな。でも、それのおかげで最良の選択ができるんだからな)

(なるほど。じゃあマスターはこの先起ることをすべて知っていますか?)

(いや、それがな、全部覚えてるわけじゃないんだ。とにかく忘れてるとこもあるじゃ……)

(やせり、完璧と言つわけではなこのですね)

(所詮人間の記憶だしな)

「和麻君、おまたせ」

「おひ。……なかなか似合つてゐるな、その服

「え、や、やう・・・?」

「ああ」

「えへへへ、ありがとづへへへ

(「ラグ強化していいのかなんですか?」)

(ハッ! しまったああああああ!)

残念ながら、月村家の会話はカットさせてもいい。べ、別に俺が会話に入れなくてしょぼーんってしてたからカットした訳じゃ、無いんだからね!

「ん?」

「どうかしましたか?」

「ああ、いや。なんでもないよ、すずか

(シア、感じたか?)

(ジョヘルシードですね、しかもすぐ近くです)

(どうする?)

(すぐ回収、と行きたいですがそれではマズイのでしょ!)

(話が早くて助かるよ。あれはなのはに任せる)

俺たちがジュエルシードの扱いについて話していくと、なのはとコーノの念話を聞こえてきた。話す人の指定ぐらにしろよ・・・。

(なのはー)

(うふ、すぐ近くだ)

(どうするへ)

(えつと・・・えつと・・・)

悩んでるな。ああ、そうか。回収に行くといふことはお茶の席から立たないといけない。でも、理由もなしに立つことができない。だから悩んでるのか。

(せうだー!)

なにを思つたか、なのはから飛び降りて走り出すコーノ。なるほど、その手があつたか・・・。

「コ、コーノ君?」

「あらひー。コーノどうしたの?..

「うん、何か見つけたのかも。ひょ、ひょっと探しinくるわ

「一緒に行こうか?」

「大丈夫。すぐ戻つてくるから、待つてね」

「そう言って駆け出すのは、よしよし、無事に抜けられてなによりだ。」

「ねえ和麻？なのはを放つておいていいの？」

「ん？ああ、少しして帰つてこなかつたら行つてみるよ」

「わう……」

え？話に乗れない俺がなにしてるのかつて？猫と戯れます。ここ、月村邸は別名猫屋敷とも呼ばれるほどに猫がたくさんいる。全部すずかが拾つてきた猫だが。ビーツやら、猫たちの里親も探しているらしい。

（もういえば、今回はなにが起るんですか？）

（大したことじやないよ。子猫が一匹目大きくなるだけ）

（…………それは十分に大きしたことでは……）

「なのは、遅いね」

「うん……」

そろそろ様子を見に行くかな。

「じゃあ俺が探してくるよ」

「お願いね、和麻」

「あいよ

なのはが走って行った先へと向かう。・・・もう終わってるとか
ないよね?

「バルディッシュ、フォトンランサー、連撃」

《フォトンランサー、フルオートファイア》

黄色の魔力弾が巨大化した子猫に降り注ぐ。

「レイジングハート、お願い!」

《スタンバイレディ、セットアップ》

なのははすぐにバリアジャケットを展開、子猫を守りに行く。

お、あれはなのはのフライヤーフィンか。飛行魔法欲しかったし、
もうつておこうかな。

(シア、アルファ・スティグマ
複写眼使うから魔力漏れないよ」といって)

(了解)

俺は複写眼を使ってなのはの飛行魔法を解析、改良して自分の飛行魔法を作る。足から羽を生やすのは止めて……そうだな、翼にするか。名前は……「ウイング」でいいか。

(ネーミングセンス無いですね)

(うるせーーー)

そんなことをしていると、先ほど子猫に魔力弾を撃った少女が下りてくる。いわすもがな、フェイト・テスラロッサである。

(おお、なかなか可愛いな)

(・・・・・マスター?)

(あ、あははは・・・・じょ、冗談だつてば)

(全く、貴方つて人は・・・・あーほら、戦闘始まっちゃいましたよー?)

(いーのいーの。なのはに必要なのは経験だからな。助けるのはどうしてもって時だけ)

(やうですか・・・・)

(わうだよ。だからもうひとつ見守るわ)

(わうですね・・・。わや~。)

(どうした? ・・・ うーましいー。)

(どうしたのですか?)

(あのままじゃ なのはが危ない。)

『テバイスフォーム』

『シューティングモード』

なのはのレイジングハートが砲撃態勢に入る。

『ディバインバスター、スタンバイ』

『フォトンランサー、ゲットセット』

互いに構え、いつでも攻撃できるよう一人。その時、巨大化した猫が鳴き、なのははそれに気を取られる。

「『J』めんね」

『ファイア』

打ち出されたのは黄の魔力弾。気を散らしていたなのはには防ぐことができない。

着弾。そして爆発。

爆風がはれ、フェイドが目にしたのは、今まで戦っていた栗色の髪の少女と彼女を庇つよう立つ一人の男の子だった。

(ふう、間一髪だったな)

(ですね、プロテクションを見ておいたのは正解でしたね)

(だな。魔力だけで障壁張るの疲れるけど、^{上れ}プロテクションなら簡単だ)

「えー!? 和麻君! ? なんでここにいるの! ?」

「どつかのダアホが勝手に行つちまうからついてきたんだよ。で、何か言つことは?」

「いめんなさい・・・」

「つたぐ。んで、そちらのお嬢さんはどなたかな？俺は和麻、柊和
麻だ」

「フュイト。フュイト・テスターッサ」

「フュイトか・・・、いい名前じゃないか」

そう言つと、フュイトの頬が微かに赤くなる。なんだ？風邪か？

(・・・・天然ジゴロ。お仕置きが必要ですかね)

「和麻君・・・・。後でお話なの」

「すんませんでしたあー！」

速攻で謝る。プライド？ナニソレ？喰えんの？

「ふふっ・・・」

そんな俺らを見て頬笑むフュイト。うん、やっぱ可愛い。

「なのは、今日のといひは引くぞ。いいな？」

「うん・・・」

なのはの顔色は暗い。負けて相当ショックだったようだ。

「まあ落ち込むのも分かるナビ。あ、じゃあ血口紹介だけでもしておいたりどうだ？」

「とたんに明るくなるのは、うん、実に分かりやすい。」

「じゃあ挨拶だけでもしていい。俺はここで待ってるから」

「うんー」

フロイトのもとへ駆けていくのは、フロイトは封印作業をしているようだ。・・・派手な封印魔法だことで、無駄が多いよな、あれ。

「ただいま、和麻君」

「ちゃんと話できたか?」

「うん」

「やつが、じゃあ戻るわ。そろそろすか達が心配するだろつからな」

「うん、もう一人の魔導師との初邂逅は幕を閉じたのであった。

フロイトとの一戦があつてから、なのはは魔法の練習の時間を増や

した。相当悔しかったんだらう。俺もよく付き合はされた。まあ、おかげで戦闘経験ができたからよかつたけどな。

「行くよ、和麻君！」

「おう…どつからでもかかつて来い！」

「ディバイインバイン

『ディバイインバスター』

「バスター！」

桃色の砲撃がこちらへと迫つてくる。回避は…無理か。

「仕方ないな…。『織^{ロード・アイアス}天覆^ツ七つの円環』！」

俺の前に七枚の花弁が現れる。一枚一枚が古の城壁に匹敵する対飛び道具用の宝具であるが

パリイン！パリイン！

なのはの砲撃はいとも簡単にそれを碎いていく。9歳でこの威力だと末恐ろしいな…。

結局、なのはの砲撃は5枚目にヒビをいたといひで止まった。本当はもっと堅いはずなんだけど…。やはりイメージが弱いみたいただな。

「なのは！次はこっちから行くぜ？」

「うん、いいよ！」

「しつかり防げよ？アクセルバレット、ファイア！」

アクセルバレット。なのはのアクセルシユーターを改良して作ったオリジナルの魔法。本来の追尾機能を廃止し、直線的な動きをするようにした。おかげで威力、速度がかなり上昇し、並の魔導師の防御魔法なら撃ち抜ける自信がある。ただし、追尾はできないので、動く敵に当てるのは技術が必要。

「レイジングハート！」

『プロテクション』

どうやらなのは全て受け止めるらしい。試しになのはのプロテクションを複写眼で見てみたが、ダメだ。強度が足りない。そんな防御では……

パリイン！

「あやあああああああ！」

当然、こつなるわな。

「おいおい、大丈夫か？」

「和麻君、酷いの……」

「だから言つたら？しつかり防げって

「あんなの予想しないもん！」

「やれやれ。ほら、立てるか？」

「うそー。」

なのは手を差し出す。なのは嬉しそうに俺の手を取つて立ち上がる。

「よし、じゃあそろそろ夕方だけビービツある？」

「もう少しやりたいー。」

「はいはい、後一回だけな。焦つてもしょうがないんだし」

「はーー」

これで少しばかり近づけるかな？俺もあの一人には友達になつてもらいたいところだしてか、そうじゃないと話が変わっちゃうからな。

・・・・やついえばそろそろまた何かイベント的なものがあつたような気がするんだけど・・・。思い出せないな。なんせアニメみたの数年前だし・・・。まあ、なるようになるだろー。

第六話（後書き）

和麻「なあ、作者？」

作者「なんだ？」

和麻「戦闘は？」

作者「無印は大事なとこだけしか戦闘は無いな。しかもお前はほとんど戦わないし」

和麻「まあ、あの二人の邪魔しちゃイカシよな」

作者「そつそつ」

和麻「じゃあ次は戦闘があるんだな？」

作者「…………たぶん」

和麻「オイ！」

第七話（前）（前書き）

作者「おまたせしましたっ！」

和麻「誰も待っていないんじゃない？」

作者「酷いッ！」

和麻「俺は事實を言つたままでだ」

作者「俺のガラスのハートはたつた今砕け散つたよ・・・」

和麻「うるせえ！」

作者「クッ・・・。えー今日は温泉へ行く話ですが、前半にダラダラと書いてしまつたため一部構成と相成りました」

和麻「強引に話を変えたか。てか、前半削れば一つに収まつたんじゃないのかよ？」

作者「まあ、いいじゃん？」

和麻「お前つてヤツは・・・」

第七話（前）

「」の前のフロイドとの一件からしばらく経った今日、世間は連休に入りしていた。が、翠屋は年中無休である。なので、連休の時などは店をほかの店員に任せ、ちょっとした家族旅行などに行くらしい。今回は高町家はアリサ家、月村家とメイドさん達と一緒に温泉旅行に行くのだ。まあ、俺がその話を聞いたのは今朝なのだが。・・・温泉へ向かう車の中はけつゞ暇だし、少し今朝の事を思い出してみようか。

「和麻君、起きて～。朝だよ～！？」

「んんっ・・・すう・・・・・」

「も～、和麻君！」

「んあ・・・・ああ、なのはか。おはよ～」

「おはよ～。なかなか起きてくれないから大変だったんだよ～。」

「ああ、悪い。てか、なのはに起しそれるなんて珍しいこともあるもんだ」

「酷いの・・・・・」

「まあまあ、そつ怒るなつて。」れはこれでアリかなつて思つ
なのはの頭を撫でてやる。相変わらずこい手触りだ。触つて気持
ちいい。

「そ、そつへへへ

なんてことをしてゐううちに寝起きでボーッとしてた頭も、活動を
開始し始める。

「わつて、なのは。着替えるから先に下に降りてくれ

「はい

なのはが部屋から出たところで着替えを始める。ちなみに俺は下か
ら着替える派だ。そんな派閥があるのかは知らないが。・・・だ
から、俺はこの後起こる恐ろしい出来事を回避することができたの
であつた。

「さて、着替えますか」

(マスター、おはよひびきます)

「ん、おはよひ

(着替えるのですか?)

「わつだけど、どうかしたか?」

(「え……。邪魔をしました。どうぞ続けてください。私は
ここから見ていますから）

「ちょー？ シアー？」

この状況はなんだ！？『乱心か！？

（何を躊躇つておられるのですか？ああ、もしかして私に着替えさせようと仰るのですか？でしたら……）

「ちょっと待て！？なんでそつなるんだよ！？しかもお前は出てこられないだろ？が」

シアが出てきたら……おそらく俺の魔力が暴走 風船のようにな

“パーン！”となるだろ？な。

（レンもある程度は抑えられますから大丈夫です）

「やういう問題じゃねえよ！あーもーめんどくさい…デバイスとの
同調の一部を一時的にカット」

これでシアにはじいちが見えない……はず。今のうちに下から
着替えるべし！

「…………よつと。ズボンはこれでいいか。後は上だけど……

「

ん~、なんかいいシャツあつたかな~。え？上半身？もちろん裸だ
よ？某蛇の人で言つとネイキッドだな。下は脱げないのか？なんて
聞かないけど。

ガチャツ

「和麻く～ん？」「飯冷める…………？」

「んあ？」

俺がドアのまわりに皿をやると、ソーサーは真っ赤になつたなのはが。ノックぐりこすればいいのに。

「お～い、なのは？」

「ここや……」

「ここや？」

「ここああああああああああーー？」

その叫び声は、朝の高町家に響くには十分すぎる音量だった。

「それで、わいきの声は着替えていた和麻をなのはが見ちやつたら
らなの？」

「へへへん・・・・・・・」

所変わつて食卓。あの後、すぐに着替えて下に降りたのだが、な
はが桃子さんと美由希さんに捕まつていた。相変わらずだなーと思
いながら席に着く。

「おはよーいわこます、十郎さん、恭也さん」

「「おはよー」」

朝の挨拶をした後に、なにかいつもと違つて空氣を感じた。例えるな
ら、遠足がある日の朝か？要するに、空氣が浮ついている。

「で、どうだつたの？和麻君の体見たんでしょう？」

「え、えと、細いけぢしつかり筋肉がついてて遅しかつた・・・・・
／＼／＼お母さん！？何言わせるのー？」

「「へふふふふふ・・・・・」」

・・・・決して空氣が浮ついてるのさあの3人のせいではないと願
いたい。あそこはスルーして、十郎さんにこの空氣の原因を聞くこ
とにした。

「あの、十郎さん？」

「なんだい？」

「今日は何があるんですか？」

あれ？ なんでもみんなそんな驚いた顔してんの？ 桃子さん達でさえ驚いた顔でこっち見てるし。え、もしかして今日何があるの知らなかつたの俺だけ？ ・・・・泣いていいかな？

「なのは、もしかして話してないのか？」

「ふえ！ ？ ？ ？ ？ あ」

「なのは、ダメじゃないか。ちゃんと伝えておかないと

「うー、うめんなさい」

情報の伝達//スでよかつた。本氣でハブられてるのかと思ったよ・。
。

「すまないな、和麻君。てっきりおまわりのものかと想つて

「いえいえ、いいんですよ。誰だって謝れることありますから。それで、今日は何があるんですか？」

「今日から2泊3日で温泉旅行に行くんだよ

と、こんな感じだ。温泉に行く、と聞いて俺は素早く準備をした。準備と言つても、着替えを用意するだけだけど。それにしても温泉か～。大好きなんだよね、温泉。

その後、全員の準備が終わって車で移動。移動した先にアリサやすかがいてちょっとビックリしたよ。だって一緒になんて聞いてないし。で、それからいろいろあって、今に至るわけだ。ちなみに、俺は土郎さんが運転する車の後部座席にいる。俺の左は窓で、右にはのは、アリサ、すずかの順で座っている。

(はあ・・・・)

(どうしたんですか？ため息なんかついて)

(いや、暇だなあ～と思つて)

(彼女たちの会話に混ざればいいのでは？)

(男の俺が女の子の会話に入れるわけないだろーが)

なのは達は楽しそうに会話をつづけている。そんな中に入る勇気は残念ながら持ち合わせてない。

(あ、そつだ。シア、質問いいか？)

(なんですか？)

(いや、魔力光のことなんだけどさ。俺の魔力光って何色なんだ？)

(？ああ、そういうえばマスターは自分自身の魔法を持つてないのですね)

(さうだが……。それになにか関係があるのか？）

(ええ。マスターの魔力光は白なのですが、複数眼を使ってコピーした魔法はコピーされた人の魔力光と同じになるんです)

(じゃあ何か？なのはの魔法を使っている間は、俺の魔力光は桃色になるのか？）

(そうなりますね。それと、コピーした魔法を改良した場合は、コピーされた人の魔力光+白色になります)

(色までパクリますか、この眼は。ま、いいや。聞きたいことは聞けたから)

(お役に立てなによりです)

「和麻君？どうしたの？」

なのはが声をかけてくる。……そつか、なのはから見れば俺つてずっとボーッとしてるよう見えるんだけど。

「ん？いや、どうもしないよ？」

「嘘なの。ずーっと外ばかり見てたし……」

なんて言い訳しよう……。まだシア達の事は話せないしなあ。

「だからなんでもないって」

「むへへ、・・・・えいっー。」

可愛い声とともにのんびりと俺の右腕にしがみついてくる。・・・・つてちょっとー? なのはさん!?

「相変わらずなのはは和麻にべつたりね」

「あらあら なのははたら大胆ね」

とのたまひ一人。上からアリサ、桃子さんね。すずかは笑つてたよ。

「ちよ、なのはー、いきなつび! はしたんだよー。」

「だつて、和麻君が楽しそうにしてなかつたから・・・・」

俺の所為か・・・・。確かに周りから見たらあんまり楽しそうじゃないのかもな。

「そんなわけないだろ? 俺はなのはと旅行に行けるだけで嬉しいよ

「か、和麻君・・・・／＼／＼／＼」

あれ? 俺なんかまずいこと言つちやつた?

「あらあら 思つたよりも孫の顔が早く見れそうね

「はいはい、それは私たちがいない所でやりなさい」

「 「 「 「 「 「 「

その後も、温泉宿に着くまでひたすらからかわれる（からかつてくるのは主に桃子さんと美由希さん）俺となのはであった。

「や・・・やつと着いた・・・・・」

からかわれ続ける」と数時間、俺達はよつやく宿に着いた。車内の記憶は・・・封印しよう。じゃないとトラウマになつそうだ。

「桃子、部屋割りなんだが・・・・・どうする?」

「そうね・・・・・確か予約では3部屋だつたかしら?」

「ああ、そうだね」

「じゃあ、私たちで一つ、恭也と忍さん、それにノエルさんとフアリンをんで一つ、子供たちで一つでいいんじゃないかしら?」

「子供たちだけで大丈夫かな?」

「和麻君がいるから大丈夫でしょ」

「・・・それもそうだね。じゃあそうしようか」

「俺は男だッ！」

「そりだよ？」

「ま、待て！そりちは女湯だろ？がー！」

「ほひ、和麻君行こひー！」

「やったー！」

「わ、分かった。行く、行くから
べつ・・・。上田使こ・・・だと？こいつの間にそんな技を・・・。

「私も行くよ。和麻君も行くよな？」

「すずかもか。なのはなじうる？？」

「私も温泉に行きたいです

「もう行くのか？」

「さて、まずは温泉よね

「でも、せひ」

なのはが何かを指さす。・・・・ん? 注意書きか? なになに・・・・?

『女湯での男子入浴は10歳以下でお願いします』

読み終わった瞬間顔が引きつったね。この野郎なんてこと書いてやがんだ、との旅館を恨んだよ。

「せひ、じゃあ行ひつか」

「や、やめてええええ!」

俺の必死の叫びも空しく、女湯に引きずりれてこくのだった・・・・。

3人とも嬉しそうだな。まあ大きな風呂つて見ただけでなんだか嬉しいなるよね。あれ?俺だけ?

「ほひ、和麻君ひつかひつか

「つたぐ、あんまりはしゃいでると滑るぞ?」

「もう心配性なんだから。大丈夫だよってきやあ！？」

ほれ見ろ言わんこつちやない。

「よつと。大丈夫か？」

「うん……。あ、ありがとうございます！」

「氣につけられて言つたのに」

「あらあら、お風呂でイチャイチャするなんてやるわね、なのは

あれ？ どうかで聞いた声が・・・つてこれ桃子さんの声じやん。恐
る恐るまわりを見渡すと・・・いましたよ、湯船の中に。しかも
美由希さんと忍さんまで。

「お、お母さん？」

「桃子さん・・・見てたんですか？」

「もあらん」

この後、また散々にからかわれたのは言うまでもない話だつた。え、ユーノ？アリサにとつ捕まつて洗われてたよ？淫獣確定だねつ！

カオスな風呂からどうにか生還した俺は、浴衣に着替えた3人組が探検に行くというので、一人ぶらぶらと散歩をすることにした。三人の浴衣姿はなかなか可愛かったので、素直に褒めたらみんな赤くなっていた。湯あたりでもしたのかな？

「ん~！いい空気だな~」

(マスター、お楽しみのところ申し訳ありませんが)

「ん? どつたの?」

(近くに魔力反応です)

「魔力反応・・・? ジュエルシードか?」

(いえ・・・それが、どうやら魔導師のようです。この魔力は以前どこかで感じたことがあるんですが・・・)

「魔導師・・・? あ~, もしかしてフュイトじゃない?」

(ああーそりだ、そうですよー間違いなくフュイトさんですー!)

「ふ~ん、近くにいるのか。じゃあちょっと挨拶でもして行きま

すか

お皿当りのフロイドは意外と速く見つかった。木の上にいたのでもうと離れたところからでも見えるのだ。

「お~い、フロイド~？」

お、じつち向いた。

「和麻？」

「おお、覚えててくれたか。久しぶりだな。ジユエルシードか？」

「ぐんと頷くフロイド。か、かわええ・・・。

「やつか。ま、健康には気をつけろよ。じゃあな~」

踵を返して歩き出そうとしたが、前に進まない。否、進めない。

「あの、フロイド~放してくれる? 嫌しいんだけど」

進めない原因はフロイド。俺の浴衣をしつかり握つてらつしゃる。

「和麻がこるつてことせ、なのはもこるんだよね?」

「ああ、こむよ~?」

「さう

それだけ言つと手を離した。

「じゃあ今度こそ行くわ。またな

フロイトの頭をじつかりと撫でる。おー、なのはも気持ちいいけど、フロイトのもまた格別だな。ん?

「どうした?顔が赤いけど?風邪か?やっぱり無理してるんじゃないのか?」

(マスター、さすがにそれはどうかと思します)

(? ? ?)

「ツーな、なんでもない!」

「やうか?フロイトがそつぱりいこうけど・・・。んじゃ、またな

「・・・うそ

旅館への道を戻りながら考える。原作からかけ離れてないか?と。まあ全部俺のせいなんだが。

(マスター、全く同じ世界なんでものは存在しないんですよ?)

「それもやうだが・・・」

(「この世界は原作から離れつつあります。何が起こるか分かりませんから、注意だけはしっかりとしておいてくださいね?」)

「分かつてるとよ

シアと話しながら旅館へ帰る。フェイトがいるつてことは探し物ジユエルシードがこのあたりにあるはず。さて、いつ戦いが起こるかな?

第七話（前）（後書き）

和麻「…………なあ、作者？」

作者「どした？」

和麻「なのはフラグが酷くね？このままだとなのは一直線だぞ？」

作者「ま～今はフラグ立てれるのなはとフェイトだけだし我慢しろ」

和麻「アリサたちは入れないのか？」

作者「入れてほしいのか？」

和麻「いや、違う！」

作者「うんうん、分かるよ。可愛かったもんね、浴衣姿」

和麻「だから違えって！」

作者「だいじょぶ。彼女たちのフラグは立てるとするならA-sからだから」

和麻「…………クソ作者が」

作者「ははははは、リア充乙」

和麻「投影、トレス、オン開始」

作者「え・・・・、ちよつ、ソレはやめ・・・」

和麻「問答無用！天地乖離す開闢の星！」
Hママ・エリシユ

作者「ぎやあああああああああ！」？

アンケート（前書き）

話の途中で誠に申し訳ありませんが、アンケートご協力お願いします。

アンケート

おはいんばんにちわ、作者です。

突然で申し訳ありませんが、アンケートを取らさせたいだきたい
と思います。

題は、「まつたり行くか、やくそく行くか」です。

今現在、ゆっくつと原作に沿いつつオリジナルを入れたりしている
のですが、チート主人公の割には暴れてないなーと思っています。
なので、今回のアンケートは・・・

- 1・ゆっくつまつたり原作に沿つて行つて欲しい
2・おはいんばん飛ばしつつ、やくそく最終決戦まで行つて欲しい
のどちらかでお願いします。

期限はとうあえず今週中とこいつにさせていただきます。たくさ
んの意見が来てくれるとい嬉しいです。

それでは、どうかよろしくお願いいたします。

第七話（後）（前書き）

作「〇ー」

和「なにこきなり落ち込んでんだよ」

作「いや、俺には」とく文才ないな~と思つて

和「まあ、こいつらへな感じもするが」

作「戦闘とキャラの心理描写が苦手すべる」

和「じゃあお前には何が書けるんだ、と一小一時間くらい聞い詰めた
い」

作「今回もグダグダと書いてひきつて長くなつちやつたし

和「ダメ作者」

作「〇ー」

和「作者ダウンしたな。では、相変わらずグダグダですが、どうぞ

第七話（後）

Side フェイト

今回のジュエルシードは温泉街の外れの森にあった。温泉へ行くアールフと別れて、私は一人ジュエルシードの位置を特定するために木の上で精神を集中していた。彼が来るまでは・・・

「お~い、フェイト~？」

誰かが呼んでいる？私は声が聞こえたほうに視線を向ける。あれ？見たことある人だな。確か・・・

「和麻？」

たしかそんな名前だったはず。

「おお、覚えててくれたか。久しぶりだな。ジュエルシードか？」

嘘をつく必要もないのに頷く。あれ？なんで悶えてるんだろう？あ、戻った。

「そつか。ま、健康には気をつけろよ。じゃあな~」

それだけ言って踵を返した。和麻がいるってことはなのはもいるのかな？ちょっと聞いてみないと。

「あの、フェイト？放してくれると嬉しいんだけど」

とつあえず木から下りて、和麻の服の端をつかむ。あれ？ この服、いつもとせつよつと違つて、まあ、いいや。とつあえず聞くことを聞かないとな。

「和麻がいるみたいじゃ、なのはせこるんだよね？」

「ああ、こゆよ？」

「やつぱりこるんだ。じゃあまた戦闘にならやつのかな・・・。

「やつ」

それだけ言つて手を離した。できれば戦いたくないな。

「じゃあ今度こそ行くわ。またな」

そう言つて彼は私の頭に乗せて撫でてきた。あ、気持ちいい・・・。

「どうした？顔が赤いけど？風邪か？やつぱり無理してるんじやないのか？」

そつとわれて初めて自分が真っ赤になっていたことに気が付いた。あう、恥ずかしいよう／＼

「ツーな、なんでもない！」

「やつが？ フロイトがやつなんぢこにナビ・・・。んじや、またな

「・・・うん」

本当にちがうよ。と撫でてほしかつたな……。はつ！わ、
私つてば何を！？と、とにかくジュエルシードの場所を見つけない
とーあいつ、集中できなによ。

「フュイト、見つかったかい」

「ア、アルフ！？」

「どうしたんだい？」

「う、うひ。なんでもないよ」

「フュイトがそう言つならいいけど……。それよりジュエルシー
ドは見つかったかい？」

「うん、だいぶ特定できたよ。今夜には捕獲できると思つよ」

「ナイスだよフュイト。さっがあたしの『主人様』

「ありがと、アルフ」

例え何があつても、ジュエルシードだけは譲れない。そう、絶対に。

俺が散歩から帰ってきたときにま、すでに夕食の時間となっていた。

「和麻くん、いわくわくー。」

なのはが手を思いつきつづんづん振つてこる。ビーッやけり隣に座つて欲しいらしい。

「あ～、分かつ分かつた」

やれやれといった表情を浮かべて、なのはの隣に座る。夕食は中規模の広間を貸し切つて使つている。料理もお膳で出てくるし、まるで修学旅行だな。

「もお～、遅いよーー！」行つてたの？」

「近くの森。空気が澄んでて美味しかったぞ？」

「へえ、和麻つて森林浴とかするんだ」

「いひじう時だけだけどな」

「でも、気持ちいいよね、森林浴つて。私もたまにしてるよ。」

「すずかも？まあ、すずかは分かるけど和麻は意外よね・・・」

「俺の扱い酷くないー!~.」

「ハヤセはな」

「なのねもフオローラーとかしてよー?~.」

「ほこせー、こつまでもバカやつになにか食べましょ!~.」

「お前のおだりうがあああああー!~.」

「ひ、わざわざやあ騒ぎながらも楽しく食事をしましたヒヤ。・・・
・「れで何事もなく終わってくれてたらよかったですけどねえ。・・・
・・。

「ふはー、かあすうああくはーん。」

・・・・・アヒト!~ひなつた。

「おこーなのは、しつかりしるーってからひちの飲み物に酒混ぜた
の誰だよー?~.」

「ここじやなこ、ちよつとへりが。ねえ、お母さん?~.」

「やつねえ。ちよつとくらうにならいいんじゃないかしり?」

ダメだこの人達。速くなんとかしないと……。

「はあ……。士郎さん、なのはを連れて先に部屋に戻りますね」

「わかつた。ただし、なのはに手を出したら……。分かつてるよね?」

「わ、分かつてますつてー出すわけないでしょー?」

「なに!? なのはには手を出すほどの魅力が無いことでも言つのかー!」

あ、頭が痛くなってきたよ!ンチクショウ・・・。

迫り来る士郎さんと恭也さん（途中参戦してきた）を回避しつつ部屋へと向かう俺だった。・・・・泣いていいよね?

「あー、疲れたあー!」

（お疲れ様です、マスター）

なのはは運んでる途中で寝ちゃったので、敷いてあつた布団に寝かせておいた。ユーノ?まだアリサに玩具にされてるよ?

「こなんで大丈夫かねー? フロイトもいたから近くにジュエルシ

ードがあるんだろ？」

（なのははさんが寝て いる時にジュー エルシードが発動したらどうしま
すか？）

「そんときは俺が行くよ。鍛錬を兼ねて、な

（手加減してあげてくださいね？）

「むしろ俺がされる側かも知れないけどな

（それはそれで面白いですね。見てる分には）

「つねにこよー？ つたぐ、俺の気も知らないで

（私はマスターではあつませんからね。分からぬいのも当然です）

「揚げ足取りに来た！？まあいいか、しばらへ寝るから何があつた
ら起こしてくれ」

（了解しました。良い夢を、マスター）

一番端の布団に潜り込む。あ、眠気が・・・ふあ〜〜・・・。

(ターー!)

・・・・ん? 誰だ?

(スターー!)

あれ? これなんか前にもあつたよつな・・・? デジヤヴ?

(マスター!)

「'つおつー..」

(シツ、静かに。みなさんまだ寝てるんですか!)

(ああ、悪い。んで、何があつた?)

何があつた? なんて聞いているが、聞かなくてもわかる。だってジ
ュエルシードの魔力感じるし。

(既にお気づきと思いますが、ジュエルシードです)

ほらね?

(場所の特定は?)

(先ほど行った森の中です。ちなみになのせとかまだダウン中で
すね)

(やつぱりか。じゃあ行きますかねえ)

(見逃す、といつ手もあるのではないのですか?)

(俺はそれでもいいにがでへ。もしなのはが知つたら、被害にあつのは俺だからな)

(マスター、苦労しますね)

(まあな。さて、行くぞ)

(了解)

Side フュイト

「うつはあー、すいこねこつや。これがロストロギアのパワーってやつ?」

「すいぶん不完全で、不安定な状態だけね」

「あなたのお母さんはなんであんなもの、欲しがるんだろうねえ?」

「わあ? 分からないけど、母さんが欲しがってるんだから、手に入

れないと。バルディッシュ、起きて」

『イエス、サー』

バルディッシュを待機状態からシーリングフォームへと変化させる。後は封印するだけだ。・・・でも、あの子出でこなかつたな。どうしたんだろ?

『シーリングモード、セットアップ』

「封印するよ。アルフ、サポートして」

「へいへい」

そのままジュエルシードを封印する。これで、一いつ回・・・。

封印して安心していると、足音が聞こえた。もしかしてなのは?そういう思いのした方を見ると・・・。そこにほ、ちよつと前にあつたばかりの彼が、そこに立っていた。

Side out

(ジュエルシードの位置は、森を抜けた先にある川です)

「了解。一気に突っ切る」

言われた通りに、森を抜ける。その先の川、具体的には川に架かる橋の上にジュエルシードを持つフェイトと協力者と思われる女性はいた。

「フェイト！」

「和麻？…どうして…」「…？」

「なのはの代理だ。あいつは今ちょっと動けないんでな」

「そう」

「なあ、フェイト。どうしてそんなものなんか集めるんだ？」

「それは、「フェイトー！」んな奴に言わなくていいよー！」アルフ・ジュエルシード・

ちつ、せっかく真意が聞き出せると思ったのに。いいところで邪魔しゃがつて。

「おい、誰だか知らないが、俺はフェイトと話をしてるんだ。邪魔するな」

「あたしはアルフ。フェイトの使い魔だ。悪いけど邪魔させてもらひうよ」

そう言うと、その女性は大きな狼へと姿を変えた。さすが魔法、なんでもアリだな。

「ジュエルシードを置いて引いてくれ、と言つても聞いてくれない

よな

「当たり前だよー。まじですかって引き下がれるわけないだろー。」

「まあそりだよな。じゃあ賭けをしないか?」

「賭け?」

お、フロイトが乗ってきた。

「そりだ。本当はお互いのジュエルシード一つひとつのがいいんだろうけど、俺持っていないから・・・そりだな。勝負をして、俺が勝つたらそのジュエルシードを渡してもらひ。そして、フロイトが勝つたら・・・」

「私が勝つたら?」

「俺は出来る限りの範囲でフロイトの手伝いをする

「そんな条件受け入れられるわけ」「分かった」フロイトー?。

「その賭け、受けてもいい。でも、ちゃんと約束、守つてもらひつか

「ひ

「分かった、ちやんと守るよ。それと・・・アルフとか言つたな。お前はどうする?」フロイトでも構わんが?

「その言葉、後悔するんじゃないよ?」

その言葉を聞いて、バルティッシュを構えるフロイト。

(マスター、どうするんですか？あんな大口をたたい)

(シアは複写眼の発動と維持、フェイトの魔法のキャプチャーと解析を頼む)

(「解。レンはお使いになりますか？」)

(「いや、いい。投影でどうにかするよ。レンには魔法のサポートを任せてくれ）

(分かりました。……ですが、いつもより制御に注意してくださいね？レンは制御が少し苦手ですから）

(ん、分かった。気をつけとくへよ。つてことで頼むよ、レン？）

(やつと出番かい？おれらはてるのかと想つたよ）

(悪い悪い。んじゃあ頼むよ、一人とも）

(（ヒスマイロード）おせのままで、我が主））

「わあ、始めようかー。」

「投影、開始」

手にするのは人造の武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。人々の“こうであつて欲しい”という想念が地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精錬された“最強の幻想”^{ラストファンタズム。}。

その名は『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}

「はああああーー！」

アルフが突進してくる。その後ろからフェイトがデバイスを構えて続く。アルフは囮か？

「くつー！」

アルフの拳を首を右に曲げて辛うじてかわす。とりあえずはコイツからだ！

『スネーク、ますじ〇〇の基本を思い出して……』

?なんか電波が飛んできたな。そのセリフは某蛇の人宛てだらうに。まあ、いい。せつかくの電波だ。ちょっと試してみよう。

投影したエクスカリバーを左手に逆手で持ち、殴^{アルフ}つてきた相手の手首を右手でつかみ、肘で顎を下から強打する。さらにエクスカリバーを逆手で持っている左手でさつき右手でつかんでいた手首を掴み直し、右手は胸倉を掴んで腰に力を入れ一本背負い。先の顎への一撃で反応に遅れたアルフは、受身も取れずに地面にたたきつけられる。自分でやつといてなんだが、とても痛そうである。

しかし、いつも綺麗に決まるとは思つてもいなかつた。電波よありが
とづー。

「・・・・・ 淫い」

フェイトがぽかーんとしている。そりや仕方がないな。まさか、自
分の使い魔であるアルフがこいつもあつさりと一撃をくらうなんて想
像してなかつただろうし。

「まずは一匹つてね」

逆手に持つていたエクスカリバーを正眼に構え直す。ここからは気
合を入れないと負ける。いくらチートでも、剣の扱いなんて素人だ
から。短く息を吐いて、緊張をほぐす。
大丈夫、いける。

「じゃあフェイト、行くぞ！」

「・・・・・ 負けない」

そうして、戦いの幕は上げられた。

「フォトンランサー、ファイア！」

黄色の魔力弾が雨あられと飛んでくる。

「ツ！ これくらいなら行ける！」

直撃コースの魔力弾だけを切り落として、ファイトに肉薄する。そのまま右から袈裟斬りを狙う。が、サイズフォームのバルディッシュに阻まれる。そのまま一人は弾かれるようバックステップで距離をとる。

「ちょっと油断してた上

「そりかね」

隙を見せないように構える一人。一見すると、宝具を持つ和麻が圧倒的に有利に見えるが、今回はそうでもなかつた。『約束された勝利^{エクスカリ}の剣』を使用するには、かなりの魔力が必要である。が、現在和麻はリミッターをかけて魔力をAまで落としているため、一回使用するだけで魔力がほぼ空になつてしまふ。そんな訳で、和麻は純粹な剣術だけで戦わざるをえないのである。

はあ・・・・。リミッター解除しつければよかつたかな。

・・・・・・・・

「ツイート」

どこからともなく聞こえてきた水滴が落ちる音。それを合図に一人は加速する。

「はああああああ！」

フェイトが上段からサイスフォームのバルディッシュを振るう。俺は下から掬い上げるよつに剣を振つて迎撃する。

キイン！

金属音を響かせぶつかり合ひ武器。俺は鍔競り合ひの状態から一步引く。力を込めていたところの抵抗が急に無くなり、バランスを崩すフェイト。

「くつー！」

「もうつた！」

（ツーマスター！ いけません、下がつて！）

再び下から掬い上げるよつな軌道で、バルディッシュを上に弾き飛ばす。勝った。俺はそう思った。シアの叫びも氣にも留めなかつた。だが、この時俺は一つ忘れていたことがあつた。・・・・・。そう、これは剣道などではなく、魔導師の戦いだということを。

「私の勝ち」

野球で言つフルスイングをした状態の俺は、自分のまわりに浮かぶ待機状態の魔力弾を見て、自分が敗北したのを悟つたのだった。

「俺の負けか」

「約束、守つてもいい?」

「わーって。じゃあ俺はそろそろ宿に戻るな。何かあつたら連絡してくれ」

戦闘した後だからものすっぽり眠い。気を抜いたらボロッ。。。じやないコテツといきなうだ。帰つて寝よ寝よ。

「分かった。アルフ、行くよ」

フュイトの隣にまづ一つの間にか復活したアルフがいた。うわ、あの眼がつて一俺のこと信用しない眼だ。まあ、仕方のないことだが。

「じゃあ、お休み。体に気をつけよう

「うん、お休み」

それだけ言つと、俺は宿の方へと足を向けた。

Side フュイト

「フュイト、あいつせびつするんだい?」

「もちろん協力してもいいよ。でも、あの子元バレなこいつにな
な

「とにかく今は今のおまかせ」

「本当に大丈夫なのか？あたしは信用できないけどねえ」

「大丈夫。そんなことをする人じゃないよ」

「へえ、ずいぶんアソツの肩を持つんだね？もしかして・・・・・」

「べ、別に和麻のことは何とも思ってないよー?」――

「そういう割には顔が真っ赤だよ、フュイト？」（＝ヤ＝ヤ）

「ち、違ひつてば。」

うう・・・・恥ずかしい//

「まあ、フロイトが言つんなら仕方ないか。じゃあ帰ろう、フロイ

「うん」

これで少しばかりハルシー探しが楽になるぜ。せやくゆれんの
喜ぶ顔が見たいな。

Side out

「あ～あ、負けちまつたか。ごめんな、シア。あの時お前の言つとおり下がつておけばよかつた」

（「え、それは違います。私がもつと早く戻つていれば……」）

「いやいや、俺が

（「え、私が

「俺が

（私が

「……やめよ、余りにも不毛すぎやる」

（せうですね。今回の敗北は授業料でござりてしましょう）
「すごいぶん高い授業料だったけどな」

（ですが、もう一度とあんな戦いはしないでじょっ）
負け戦

「やうだな

（今度は、勝てるでじょっ）

「当然。次は負けねえよ」

(それでこそ我が主です。さて、急いで宿へ戻りましょう。余り遅くなると誰かに気づかれますよ)

「ん、了解。トレース、アカト投影、破棄」

今まで持ちっぱなしだった剣を消す。こんなん持つていつひつらしてたら一発で捕まるからな。

「あ、そういうえばキャプチャーつまくこった?」

(はい、フォントランサーだけですが、つまく行きました。改良しますか?)

「ん~、宿まで暇だしゃろつかな」

(了解しました。複写眼を起動させます)

俺は歩きながら、魔法の改良を行つとこづ器用なことをしながら、一路宿を団指した。

(・・・・・そういえば、フュイトさんとの約束つてのはせんくの裏切りになりませんか?)

「げ・・・・・」

(「まく立ち回らないと大変なことになりますね）

「…………どうにかしてバレないよう動くしかないな」

くそつ、また厄介事が増えたよちくせいつ。

第七話（後）（後書き）

作「まずはアンケートの結果から

和「了解。アメリカ様、ソラト様、某スーパー「コーディネーター様、アンケートの御協力誠にありがとうございました」

作「結果はーの『ゆづくりまつたり原作に沿つて行く』となりました！」

和「あくまで原作に沿う、だからオリジナル展開はいれるのか」

作「まあね。それと、某スーパー「コーディネーター様から贈り物が届いてます」

和「お！なになに！？」

作「太陽銃ガン・デル・ソル、暗黒銃ガン・デル・ヘル。それとデバイスとしてソル・デバイスを頂きましたー！」

和「ボクタイかよ！？」

作「某スーパー「コーディネーター様、ありがとうございます。のちのち使つと思いますので、無限の剣製の中に納めさせていただきます」

和「固有結界は押入れじゃねえ！」

作「うるさい！-じやあ持つてろー！」

和「！」、これは…太陽おおおおおおおおおおおおおお…。」

作「うるせえ…。」

和「すまん、つい…。」

作「某蛇の人が「太陽おおおおーー」って戦場で叫んでるの思い出すからヤメレ」

和「それ4だろー。」

作「話が脱線しまくりだらうがー。」

和「お前の所為だろー。」

作「ゴホン、えー、そんなわけでこれからも応援よろしくお願ひいたします」

和「御意見などありましたらお知らせください」

作・和「それでは、また次回ー。」

第八話（前書き）

久しぶりの投稿です！

時間が無い + ネタがないの一重苦で更新が遅れました。誠に申し訳ありません。

なお、眠いのをガマンして変なテンションで書いてしまったのでおかしなところがあるかも知れませんので、もし見つけた場合はお知らせください。

それでは、どうぞ。

変更点

- ・「・・・」を「...」にしてみました。
- ・デバイスの発言を一部英語表記にいたしました。（簡単なものだけ）

夜に染まる街のとあるビルの屋上。そこに漆黒のバリアジャケットを纏つた一人の少女が佇んでいた。彼女の隣には、妙齢の女性が暇そうにしながら座っている。時折、少女を見上げて何かを尋ねているようだが、少女は頭^{かぶり}を振るばかりであつた。2、3時間経つた頃、少女は落胆した表情を浮かべながら、女性は少女を慰めながら、その場から姿を消した。

温泉旅行から帰ってきて数日が経つた。温泉での一件以来、ジエラードの反応は無く、フロイトからの連絡もない穏やかな日々だった。

「のはー。朝だぞ、起きるー。」

「うにやう、後五分……」

ピクッと俺の顔に青筋が立つ。

「ふにゃあああああー?」

朝から騒がしい高町家であった。

一日はあつと書つ間に過ぎ去つ、夜。時刻は午前一時、丑二つ寺と呼ばれる寺門である。

(マスター、起きてくださいーーー)

(……まあ、起きて下さいーーー)

(寝ぼけてる場合、いやあつませんーー、ジユエルシーの反応ですーー)

(……んあー、久しぶりの反応だね。で、今何時?)

(午前一時半です、マスター)

(……「メン。今回バスで)

(ちよ、マスターーなに言つちやつてんですかーー早く封印しないと……)

(だ、だつて一時だよーーー丑二つ時だよーーお化けとかでるかも知れないじゃんーー?)

そつ、俺は小さい頃からお化けの類が大の苦手なのだ。怪談とか三分も聞いてられない。

(くわ、ちゅうとマスターが可愛いと思つてしまつた自分が憎らしいです……)

(?何言つてんだ?)

(なんでもありませんーほら、早く行きますよー)

(えー。もう、しようがないなあ……)

結局、押し切られて封印に向かつてになつてしまつた。デバイスに負ける俺つて……。

(じゃあ、とりあえずバリアジャケット展開して飛んで行こうか。ゼウセフュイトもいるだろ?!)

(了解。…そりいえばマスター、バリアジャケット着るの久しごりですね)

(やうだね……ってあれ?この前のフェイント戦の時着てなかつたつけ?)

(何言つてるんですか?初めてお会いした時以来、ずっと使つてないじゃないですか?)

(初めて会つた時以来……つてええええええええええええ!?)

ここにきて衝撃の事実が発覚!俺は今まで一度しかバリアジャケットを展開していなかつた!

(俺はてつくりオートで展開するのかと思つてたよ……)

(そんな訳ないでしょ。次からは『眞をつけてくださいよ。）

（分かった。じゃあ、セットアップ！）

（『A11 right master』）

眩い光が俺を包み込む。その光が収まるごと、そこには黒地のTシャツに黒のジーパン、それに地面につきそうなほど長い髪の黒いコートという、全身真っ黒な格好の俺が立っていた。

（黒子と間違えそうなほど真っ黒ですね。それにこの季節に『パー』は似合いませんよ。）

（うわー決めちまつたものは仕方ないだろ。）

（ふふふ、ところがビックリ。何と、私はいつでもバリアジャケットを変えることができるのです。）

（おお、すげえー。ですが御都合主義だな。その話は空の上ではありますまい）

（了解しました、マスター）

（え？ なのは？ 爆睡してたから置いて行つたよ。）

「で、現場に着いた訳なんだが……」

(これは……)

俺の視線の先には、巨大化した花が咲いていた。例えるならラフレシアだな。それよりもさらに大きいけど。ぶっちゃけ近寄りたくない。生理的にイヤだ。

(マスター、先客がいるみたいですね)

「あ～、フェイトだろ？あいつよくあんなのに攻撃できるよな」

(あの植物　仮にラフレシアとします　　の攻撃方法は根による攻撃と種子による攻撃の一一種類ですね)

種子……？タ　マシンガンみたいなもんか？

(それと……あそこから花粉のようなものが噴き出でますね。あ、フェイトさんが花粉の中に突っ込んで……)

花粉の中に突っ込んだフェイトは、バリアジャケットがどこか溶けていっているという、とてもアダルティな格好になっていた。

「植物園の中だっただけマシか……？」

(ですね。ですので、遠距離からの攻撃をオススメします)

「だよねー。じゃあ最近作った魔法でも試してみるか。作成時間5分の」

(最後の5分で一気に不安になつてきました)

作った俺も若干不安だが、まあ大丈夫だらう。……多分。

「よし、じゃあ…。(フュイト、聞こえるか?)」

(！ 和麻！？)

(おひよ。ヒーリングで今戦闘中だろ?)

(な、なんで知ってるの…?)

(だつて今見てるし)

俺がここに来た時も全く気づいてなかつたもんなあ。気づいたら何かしていくるはずだし。

(ええっ！／＼／＼)

ん？ フュイトがみるみる真っ赤になつていくな。まさか、さつきの花粉で…？

(おい、大丈夫か！？)

(ふえ…？う、うん。大丈夫だよ。それより…)

(それより?)

(それより……見た?)

見た……ってなんの」とだ?

(? よくわからないんだが、見たって何の」とだ?)

(ツーな、なんでもないよ! なんでもー)

(?)

変なフロイトだな。つと、そんな」とより

(フロイト、一回いつままで下がれ!)

(ええつーな、なんで…?)

(「からあの植物野郎を地に沈めてやるの。だから早く下がれ)

(「う…、でも…)

(どうしたんだ?)

なんかわっさから様子がおかしいな。やつぱりわっさの戦闘で怪我
でもして動けないのか?

(フロイト、本当に大丈夫なのか?)

(だ、大丈夫だよ。だから(ハア~イ、ちゅうとこにいかしら?)ア、
アルフ!?)

(アルフ? 確か使い魔だったか?)

(御名答。それよりアンタ、アタシの『主人様』に何してんだい?)

(何つて退避を)

(アンタはフュイトに、あの恰好のままで退避しろって言つのかい
?)

言られて氣づいた。そういうえばさつき花粉を浴びて際どい格好に…。
つてうわ、なんてこと言つたんだわっさの俺! -

(やつと氣づいたようだね。アタシが言いたかったのはそれだけさ)

やつちまつたよ、俺。最低だよ、俺。フュイトにも嫌われただろう
な~。ああ、何もかもがどうでもよくなつて 。

(マスター! ? 戻つてくへださー! -)

「うおー! びっくりしたじゃないか!」

(マスターがぼーっとじてゐからじゃないですか!)

ちゅうとネガティブの世界に入つてしまつていったようだ。反省反省。

「『』めん。で、フュイト達は?」

(既に退避できています)

「ん、了解。じゃあ行くぞ」

俺はラフレシア（仮）に向けて、手を翳す。田標地点まで750m
かよし

「生者のために施します。

死者のためには花束を。

戦友^{とも}のために剣を持ち、

己が敵には死の制裁を。

しかして我ら

正義の列に加わらん。

ヒイラギ・カズマの名の下に、

この世の悪に鉄槌を

詠唱を終え、翳していた手を上にむりくりと揚げて勢いよく振り下ろす。すると

ドオオオオオオンー！

身を裂くような激しい音とともに、巨大な雷^{いかづち}がラフレシア（仮）に

降り注いだ。

「うん、なかなかの威力だな」

(感心してゐる場合かーっ…びつするんですか、あのクレーターは！？)

そう、ラフレシア（仮）を消し飛ばしたのはいいのだが、代わりに大きな穴が開いてしまった。威力間違えたかな…。

(マスターの新魔法を信じた私がバカでした……)

「ま、まあまあ。一応結界内だから大丈夫だつて」

(それでもです！ジュエルシードまで消し飛ばしてしまつたらどうするんですか！？)

爆心地クレーターのほうをチラシと見ると、フェイトが封印作業をしていた。よかつた、さすがにジュエルシードまでは消し飛ばしていないみたいだ。

(マスター！ちゃんと聞いているんですか！？)

その後、数時間に渡つてシアのお説教は続き、気が付いたら空が白み始めていた。説教の念話がダダ漏れだつたため、それを聞いたフェイトとアルフは迫力に負けて、お礼を言つることもできずに帰つて行つた。

そして、あの魔法は使用禁止にされてしまった。とほほ…。

「…ただいま～（ボソッ」

「お帰り、和麻君…。ビニに行つてたのかな、かな？」

窓から入つてきた俺を待ち受けっていたのは、魔王だった。（誤字に
非ず）

「あ、あはは……。お、おはよ～、なのは。今日は早いんだね」

「うさ。和麻君のおかげでね、とっても早く起きたんだよ?」

やべえ。笑顔のはずなのに寒気がとまんねえ。

「へ、そつか。そりゃよかつたな」

「うさ」

田だ。田が笑つてねえ。

「え、えっと、なのは? 今日も学校があるんじゃないのか?」

「和麻君、今日は学校お休みなんだよ?」

「、これはあれか？浮気がバレた時の雰囲気なのか！？」

「そ、そうだったのか。なら、「言いたいことは、それだけ？」ひ
いいいい！」？」

「ま、待て。落ち着くんだ！そ、う、そ、うだ……。まずは状況確認だ。

正面：魔王降臨中なのは

右：窓

左：部屋のドア（数m先）

後ろ：壁

驚いた。状況を打破できそうなものが何もない。このままだと……。

「チェックメイトだね、和麻君」

「ま、待て。なのは、落ち着いてくれ！」

「ゆづくつ〇 H A N A S H I じょりうね 和麻君」

「くそつ、これが言葉のキヤツチボールってヤツか！」「：レイジングハート」「A1」「Right」って、待て！デバイスは反則だ
ぎやあああああああ！」

見せられないよ！」

「ひ、酷い目にあつた…」

「「やははははは」

まさかデバイスで『ペリー』とか『ペリーリー』とか『ペリーリー・ツー』とかされるとは思つてもみなかつた。

「さすがにアレはやり過ぎだと思つんだが？」

「だつて、朝起きたら和麻君がいなかつたんだもん…」

「理由を説明する前に襲われたらどうしようもないよな」

「う…。そ、それよりなんで今朝いなかつたの？」

「逃げたな。…まあいい、説明してやるよ。

説明中
といつわけだ

まあ、説明はめんどいので省りや…今手抜きつていつた奴誰だ！出でこ…出てきて30秒で死ぬぜ？……俺が。

……せこ、たくさんの「お前かよ！」突っ込みを頂きましてあり
がとうござります。え？面白くなー？」「めんなさい」「めんなさい。
だからその手に持つてるもの投げないでえー！

「ん？なんかヘンな電波が……」

「どうしたの？..」

「いや、なんでもない。それより、分かってもらいたか？」

「うそ、私を放つておこして夜中にフロイドちゃんと会つてたんだよ
ね。よお〜く分かったよ」

田、田のハイライターが消えてやがる…。なんて威圧感だよ。震えが
とまらねえ…。

「いや、待て。なにも分かつてないだろー。」

「O S H I O K E だよ、和麻君。覚悟はいい…？」

「全然よくないからー。レイジングハートを置いて話しあひじやな
いかーってシアー！お前もなんか言えよー。」

(なのはなちゃん…。殺るんならコイツだけをやつなさいー。)

「あつがとつ……つて違つ！お前もかーお前も敵なのか！？」

「ナリだね。じやあお望み通り和麻君だけにすりよ。

「待ちやがれ！つてあれ？体が動かん。まさか、バインドー？屋内で！？」

「大丈夫だよ、和麻君。結界は張つてあるから

「そうか、それなら安心……じゃない！オイ、ナリの淫獸！見てないで助けやがれ！」

「ああ、ああ、ああひひひひ（無理です。和麻さん、安らかに眠つてください）」「

四面楚歌。まさかの身で体験することになるとは…。

「ティバイイイン……」

神聖な？これつてまさか……
D i v i n e

『D i v i n e buste』

「バスター――――！」

「ぎゃあああああああああ――！」

これからはなのはを怒らせないよつて。そう心に決めて、俺の意識は闇へと沈んでいった。

第八話（後書き）

どうも作者です。

今回は和麻が意識不明の為、私一人で進めさせていただきます。

今回のお話は完全オリジナルになりました。理由は簡単、原作を忘
れたらです。

なので今から見直してこようと思います。

最後に、この小説を読んでくださる方、感想を下さる方に感謝を申
し上げます。

それでは、また次回。

アディオス！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8091m/>

魔法少女リリカルなのは～複写と複製のフェイカー～

2010年12月21日14時14分発行